愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 130 集

南木戸遺跡

2004

財団法人愛知県教育サービスセンター

愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序

中部新空港の開港や愛知万博の開催など、いま愛知県は日本全国でもっとも元気な県として注目を集めています。

昔をさかのぼれば、ヤマト王権の成立期にあたる古墳時代初頭頃も、愛知県地方の人々が全国各地で盛んに活動していた時代であることが最近の研究でわかってまいりました。

本書で報告する南木戸遺跡は、まさにこの時代における尾張地方のもっとも中心的な大集落群である萩原遺跡群の一角を占める、当地方の歴史上、大変重要な集落遺跡であります。

このように重要な遺跡の調査成果がおさめられた本報告書が、さまざまなかたちで活用され、ひいては埋蔵文化財の保護に結びつくことを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査の実施に際して、ご理解とご協力をいただきました地元住民の方々をはじめ、関係者および関係諸機関の皆様方に、厚くお礼を申し上げる次第です。

平成 17 年 3 月

財団法人愛知県教育サービスセンター
理事長　　古池庸男

例　言

1．　本書は、愛知県一宮市萩原町河田方字南木戸に所在する南木戸遺跡（愛知県遺跡番号 02082）の発掘調査報告書である。

2．　発掘調査は、愛知県水道用水供給事業にともなう事前調査として実施し、愛知県企業庁・尾張水道事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが実施した。

3．　調査期間は平成 15（2003）年 4 月から 5 月までで、調査面積は 195 ㎡である。

4．　調査担当者は、石黒立人（主査）、樋上　昇・早野浩二（以上、調査研究員）が担当した。

5．　発掘調査にあたっては、次の各関係機関のご指導とご協力を得た。

愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県企業庁、尾張水道事務所、一宮市博物館

6．　発掘調査においては、（株）大増コンサルタンツの測量支援を得た。

7．　本書の編集は樋上　昇がおこなった。執筆は、樋上　昇、鬼頭　剛（以上、調査研究員）が担当し、その分担は目次に記した。

また、第Ⅲ章については、2 は山形秀樹氏（パレオ・ラボ）、3 は植田弥生氏（パレオ・ラボ）に玉稿を賜った。

なお、遺物の写真撮影については、福岡　栄氏に依頼した。

8．　報告書作成の整理は平成 16（2004）年 10 月から 12 月までの 3 ヶ月間でおこなった。

9．　報告書作成にかかる整理作業には、次の方々の助力を得た。

山口典子（調査研究補助員）、後藤恵里・服部里美・服部久美子・村上志穂子（以上、整理補助員）

10.　本書で使用した遺構の遺構の略記号は次のとおりである。

SB……建物跡、SD……溝跡、SK……土坑、SX……その他、NR……自然流路

11.　調査に使用した座標は、国土交通省告示に定められた国土座標（平面直角座標）第Ⅶ系に基づくものであり、海抜標高は T.P.（東京湾平均海面高度）による。ただし、表記については旧基準 「日本測地系」による。

12.　本報告書で使用した土壌色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に準じた。

13.　調査記録・出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管している。

14.　本報告書の作成あたっては、次の関係各機関・各位のご協力・ご指導を賜った。

愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、一宮市博物館、（株）パレオ・ラボ、久保禎子、土本典生（以上、敬称略 50 音順）

本文　目次

挿図　目次

表　目次

写真図版　目次

遺構図版　目次

遺構写真図版　目次

遺物写真図版　目次

第Ⅰ章　調査概要

調査にいたる経緯と調査の経過

南木戸遺跡は、愛知県一宮市萩原町河田方字南木戸に所在している。1962（昭和 37）年の名神高速道路建設にともない、名古屋鉄道尾西線と交叉する地点の東約 110 ～ 120m にある河田方高架橋の敷設工事において、古墳前期に属する多量の土器・木製品が出土し、一宮市教育委員会が遺物の採取をおこなった *。

今回の発掘調査は、名神高速道路南側の側道にあたる市道 256 号線の下に水道管を埋設するための事前調査で、愛知県企業庁ならびに尾張水道事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として愛知県埋蔵文化財センターがおこなった。調査区は、2001（平成 13）年 10 月の試掘調査の結果をふまえ、かつての遺物出土地点よりおよそ 50m 東側の地点に全長約 70m、幅約 3m の範囲で設定された。調査面積は 195 ㎡である。

発掘調査は 2003（平成 15）年 4 月 14 日から同年 5 月 14 日までの 1 ヶ月間で、調査担当者は石黒立人（主査）、樋上　昇・早野浩二（以上、調査研究員）である。出土遺物および記録類の整理作業ならびに報告書の作成は、2004（平成 16）年 10 月から同年 12 月の 3 ヶ月間でおこなった。

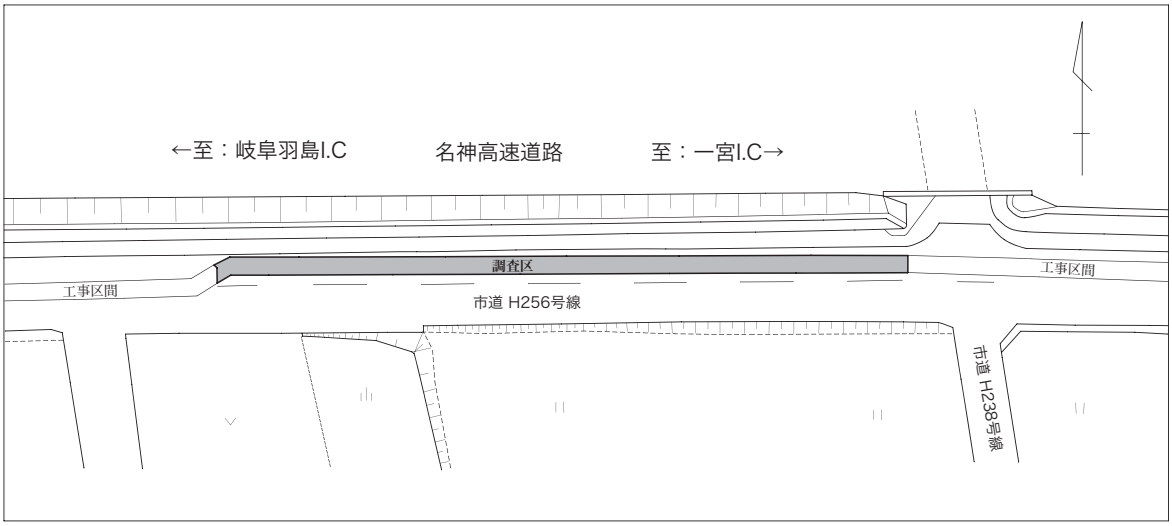


図 1　調査区位置図（1：700）

＊　澄田正一・大参義一・岩野見司 1967「南木戸遺跡」『新編　一宮市史　資料編二』

地理的・歴史的環境

南木戸遺跡は濃尾平野を北東から南西に流れる木曽川の一支流である日光川の左岸に形成された沖積微高地上に立地しており、現地表面での標高はおよそ5mを測る。

この地域は弥生時代以降も河川による沖積作用が著しく、発掘調査によって、現地表面では確認できない旧河道が各所で確認されている。弥生〜古墳時代の集落はこれら旧河道によって形成された自然堤防の微高地上に展開しており、微高地はおおむね北東から南西方向に細長くのびている。

南木戸遺跡の周辺は、特に弥生〜古墳時代の遺跡が集中する地域として注目されている。弥生前期の集落には、本遺跡の北約1.2kmに八王子遺跡*、北東約500mに山中遺跡**がある。

八王子遺跡では、二重の環濠と円筒形土坑群が確認され、環濠内からは土偶3点、人面付土器のほか、遠賀川系土器・条痕紋系土器が多量に出土している。また、山中遺跡では、一重の環濠と竪穴住居10棟、方形周溝墓9基、土坑25基が確認されている。方形周溝墓はすべて四隅が切れるタイプの周溝を有している。

弥生中期前葉（朝日式期）の八王子遺跡では、前期の集落よりも西に新たな居住域が築かれ、二重の環濠をめぐらせている。この集落は中期中葉（貝田町式期古段階）まで継続し、集落の規模や遺構密度の高さから、尾張北西部における拠点集落に位置づけられる。

このほか、南木戸遺跡の南約150mに位置する苗代遺跡、さらに南西約700mの河田遺跡からも中期前葉〜中葉の土器が出土している***。

弥生中期後葉（高蔵式期）には、八王子遺跡で新たな居住域が形成され、その後、墳丘の一辺が15mを超える大型方形周溝墓を含む墓域となる。この居住域から墓域への過渡期に、外縁付鈕1式の銅鐸（八王子銅鐸）が倒立状態で埋納されている。

この時期の土器は、前述の苗代遺跡や南木戸遺跡の北西約300mにある雀戸遺跡、南西約500mの二タ子遺跡からも出土しており、南木戸遺跡周辺の微高地上では幅広い集落展開が確認できる***。

弥生後期前葉（八王子古宮式期）には、八王子遺跡で新たな居住域の展開が認められ、後期中葉（山中式期前半）の空白期をへて、後期後葉（山中式期後半）にも小規模な集落が営まれている。

後期中葉〜後葉には、南木戸遺跡の北東約1kmに位置する北川田遺跡と前述の山中遺跡で墓域が形成され、居住域と墓域が分離して築かれるようになる。

弥生終末期〜古墳初頭（廻間Ⅰ式期）には八王子遺跡で、突如として巨大な首長居館が出現する。北東から南西に流れる幅約10mの大溝をはさんで、北には大型掘立柱建物1棟とそれを囲む南北約80m、東西約40mの方形区画があり、南には南北約200m、東西約110mの区画内で掘立柱建物や竪穴住居群が展開する。大溝の北肩には直径約5mの木組みをほどこした大規模な井泉が築かれ、井泉周辺の大溝内からは銅鏃5点のほか、ガラス小玉・ヒスイ勾玉・武器形木製品などとともに1000点を超える大量の小型精製土器群が出土した。以上のことから、大溝の北は大型掘立柱建物と井泉を中心とする首長の祭儀空間とみられ、南側の居住空間とともに出現期の首長居館と考えられる****。

このほか、苗代遺跡・二タ子遺跡・河田遺跡などからも廻間Ⅰ〜Ⅱ式期の土器が多量に出土しており、その範囲は南木戸遺跡を中心として南北約3km、東西約1.5kmにおよぶ。近年では、これらの遺跡群を総称して萩原遺跡群とよび、ヤマト王権成立期には濃尾平野の中心的な位置を占めた集落群として特に注目を浴びている。

＊　愛知県埋蔵文化財センター2001『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集

＊＊　愛知県埋蔵文化財センター1992『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集
愛知県埋蔵文化財センター1993『山中遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第45集

＊＊＊　澄田正一・大参義一・岩野見司1967「南木戸遺跡」『新編　一宮市史　資料編二』

＊＊＊＊　樋上　昇2004「集落・居館・都市的遺跡と生活用具－中部」寺沢　薫編『考古資料大観10　遺跡・遺構』小学館

図２　南木戸遺跡と周辺の遺跡（国土地理院発行　名古屋北部　１：5,0000 を使用）

第Ⅱ章　遺構・遺物

主要遺構の概要

南木戸遺跡の調査では、古墳・古代・中世・近世の４時期にわたる遺構を確認した。遺構別では、掘立柱建物２棟、竪穴住居 13 棟、溝８条、土坑 190 基、自然流路１条である。すべての遺構の所属時期ならびに詳細なデータは付属の CD-ROM に収めた遺構一覧表に掲載してあるため、ここでは、主要遺構の概要についてのみ記す。

１．第１遺構面（図４・５）

今回の調査では、地形的に最も高い箇所で１面､低いところでは３面の遺構検出面を確認した。最も高い VA2g 付近（図４参照）では、標高 4.5m 付近で古墳前期初頭から近世にかけての遺構を同一面で検出した。ここから東西いずれにも下がっており、調査区の東約半分は古代（8 世紀前半）の自然流路 NR01 にあたる。なお、NR01 の東岸は調査区内で確認できなかった。NR01 の上面には中世の土坑群があることから、NR01 は中世には埋没していたことがわかる。

調査区西端付近では、第１面で古代から近世の遺構を検出し、第２・３面で古墳前期初頭の遺構を確認した。第１面では、VA2b 付近で幅約 4m、検出面からの深さ約 20cm の溝 SD01 がある。埋土中からは８世紀前半の須恵器杯 B 蓋（図 13-31）、伊勢系の土師器長胴甕（32）が出土している。この SD01 周辺には、古代の小土坑（柱穴？）が集中する。また、SD01 より西側に位置する SK01 からは小型の折敷底板（図 15-1）が出土している。

調査区中央部の地形的に最も高い地点では、中世の大型方形土坑群（SK52･53･77）に重複して、古墳前期初頭の土坑群が集中している。このうち、

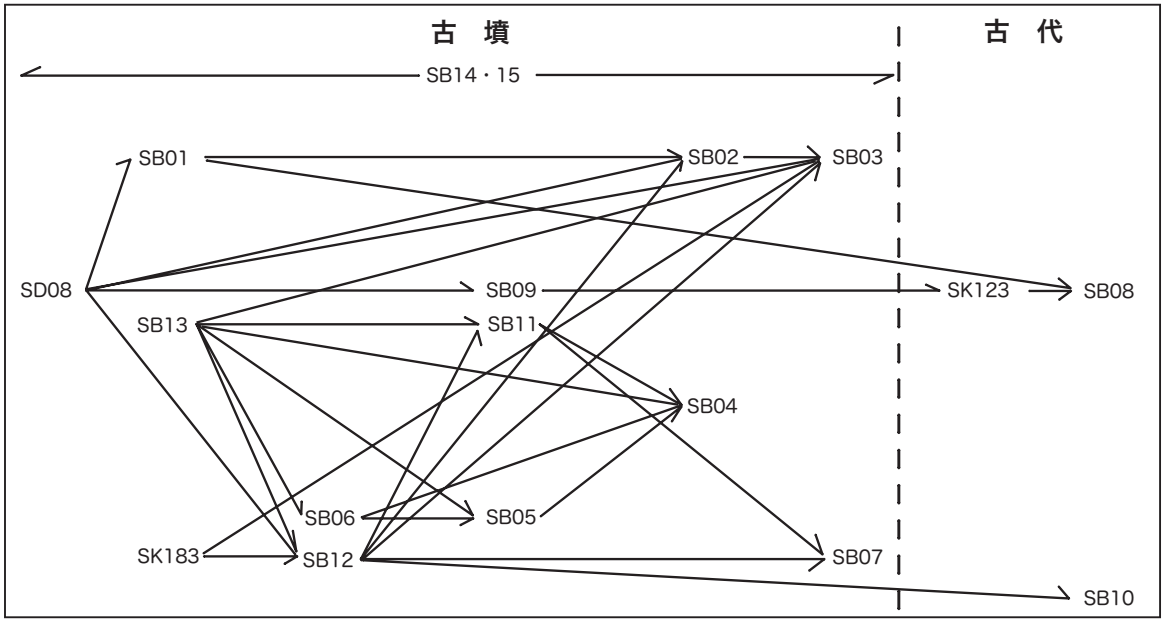


図３　主要遺構変遷図

SK61・67・73・75・82・85・170・173 で 4 × 4 間の掘立柱建物 SB14、SK91・95・97・161・162・165 で 2 × 2 間の掘立柱建物 SB15 がそれぞれ構成される（図 4）。このほか、大型の土坑 SK182 からはほぼ完形の小型台付甕（図 13-29）が出土している（図 5）。これら掘立柱建物および土坑群は相互に重複関係をもつが、後述する竪穴住居群との重複関係はないため、明確な所属時期は決めがたい。

2．第 2 遺構面（図 6 ～ 9）

第 2 遺構面では、竪穴住居 12 棟と土坑 29 基を検出した。このうち、SB08・10 と SK110・111・113・118 ～ 124・137 ～ 143・155・158・175・177 ～ 180 は古代に属する。SB08 内の土坑 SK120 からは、8 世紀前半頃の須恵器甕（図 12-21・22）と伊勢系の土師器甕（23 ～ 25）が出土している（図 9）。

古墳前期初頭に属する竪穴住居 SB01 ～ 07・09・11・12 は相互に重複して検出しており、その前後関係はおおむね図 3 のようになる。このうち、SB01・03・05・06・12 からは廻間 I 式期後半～ II 式期初頭頃の土器が出土している（図 11）。また、SB02・03・10 からは炭化材が出土しており、暦年較正値は SB02 が cal AD240、SB03 が cal AD25/45/50、SB10 が cal BC40/5 となっている。

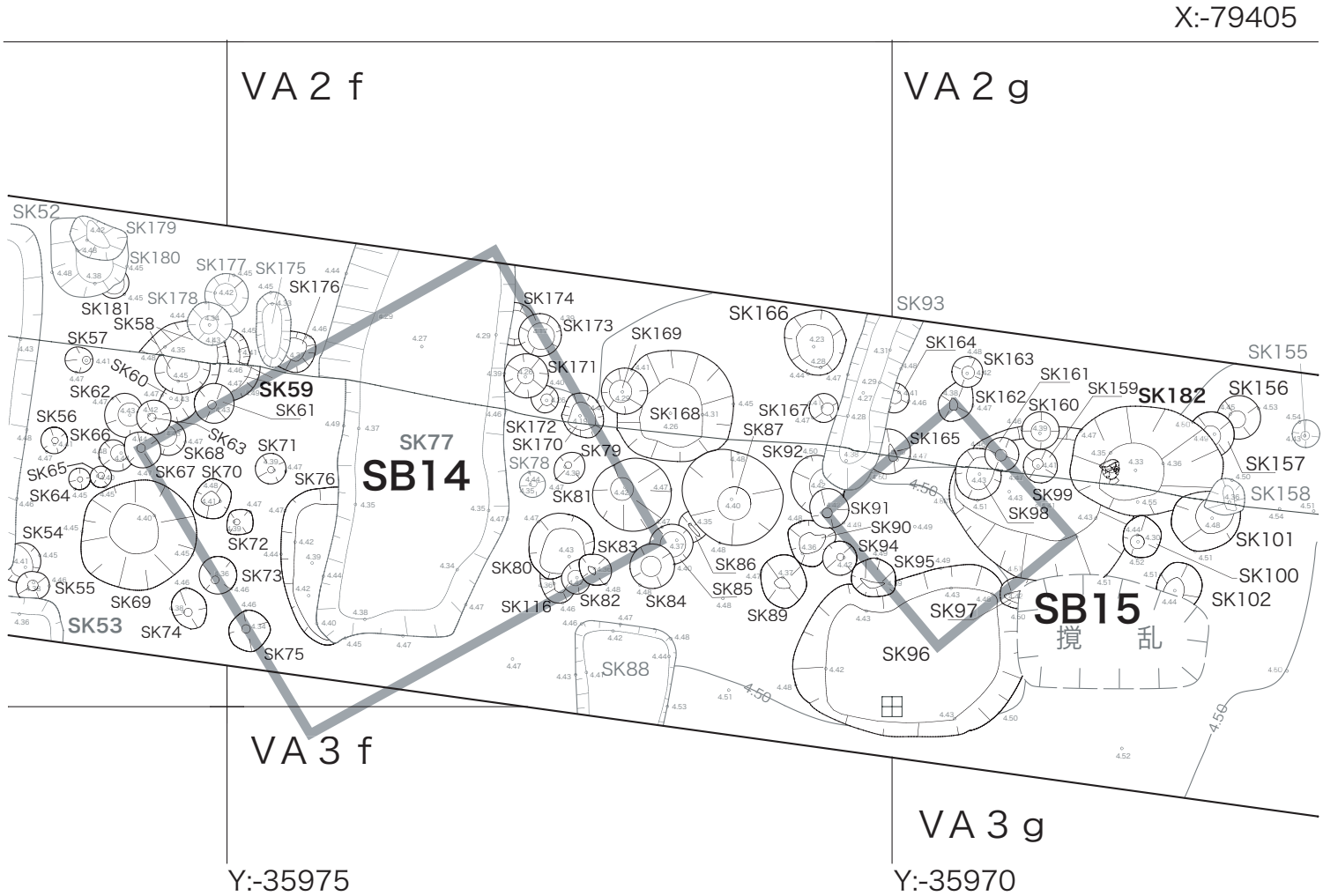


図 4　SB14・15 平面図 1：50

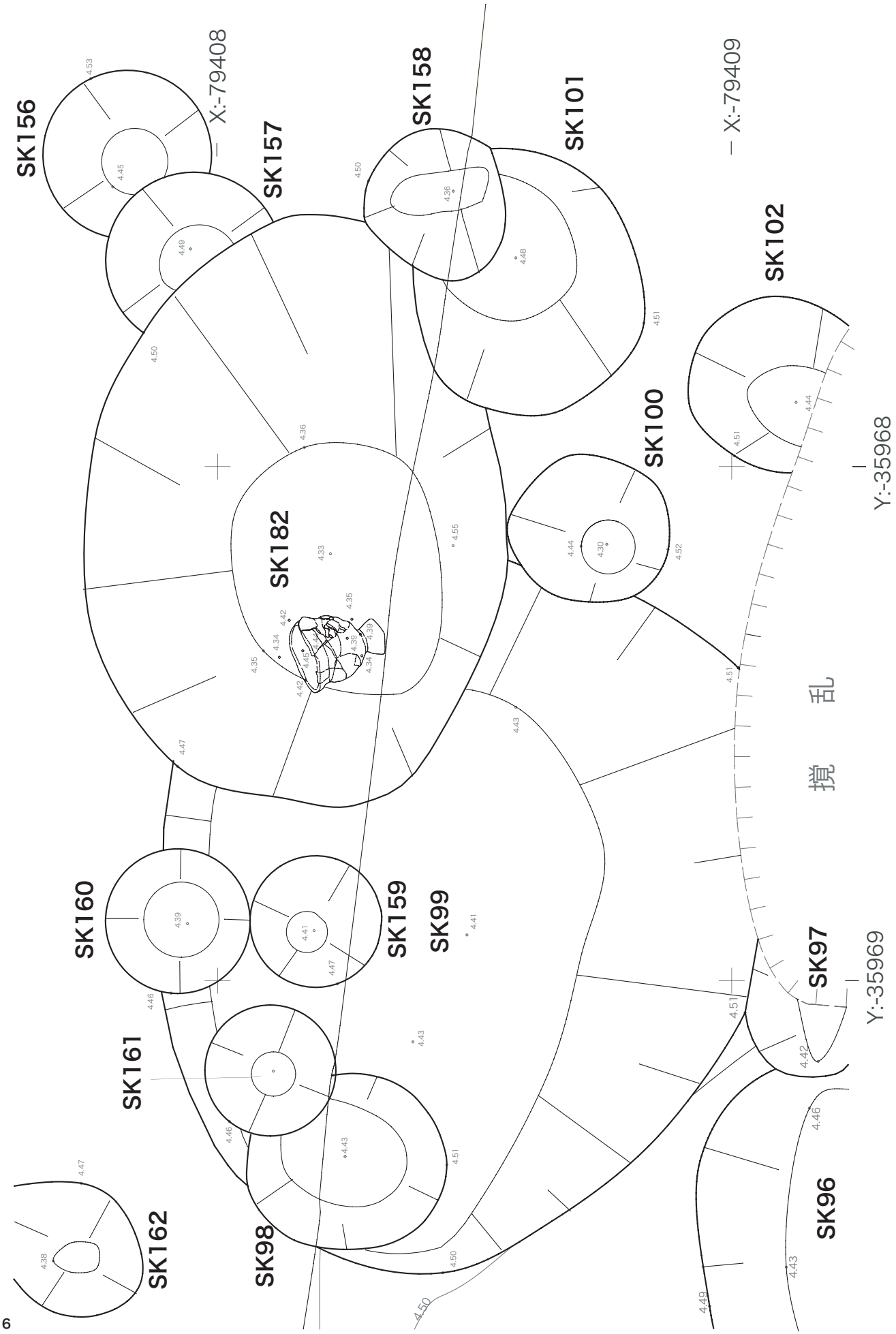


図５　SK182 土器出土状況 1：10

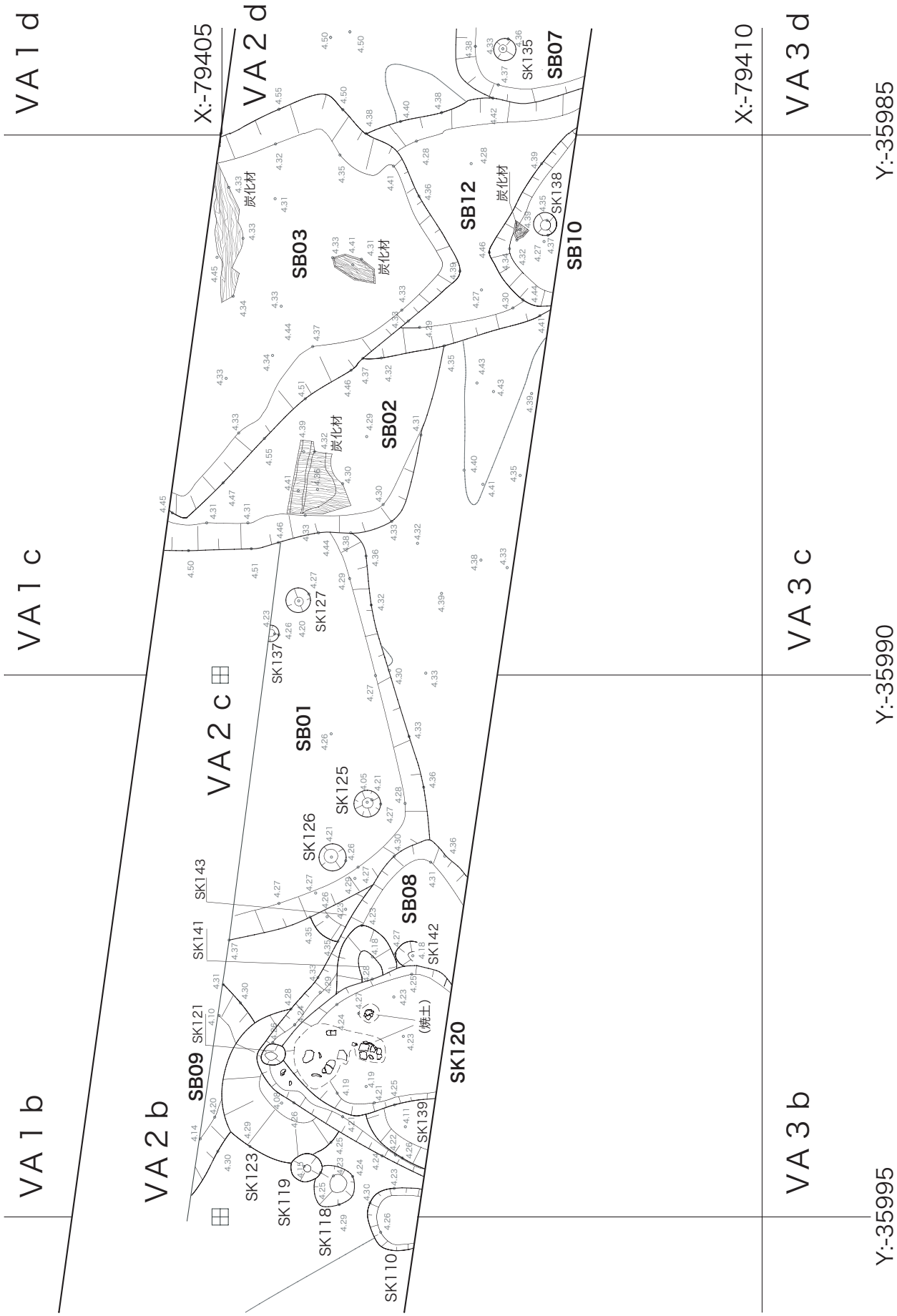


図６　第２面遺構図 (1) 1：50

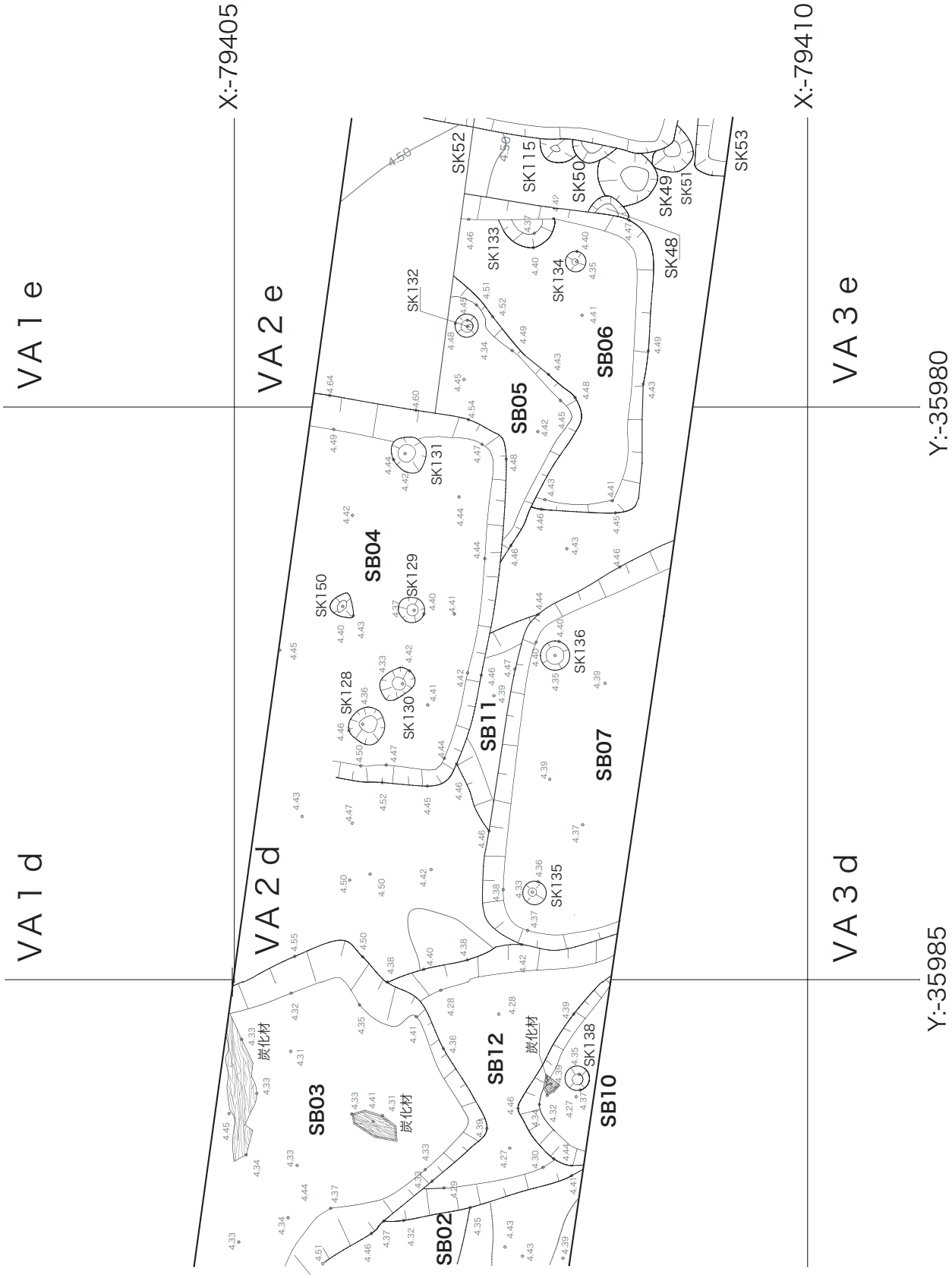


図７　第２面遺構図 (2) １：50

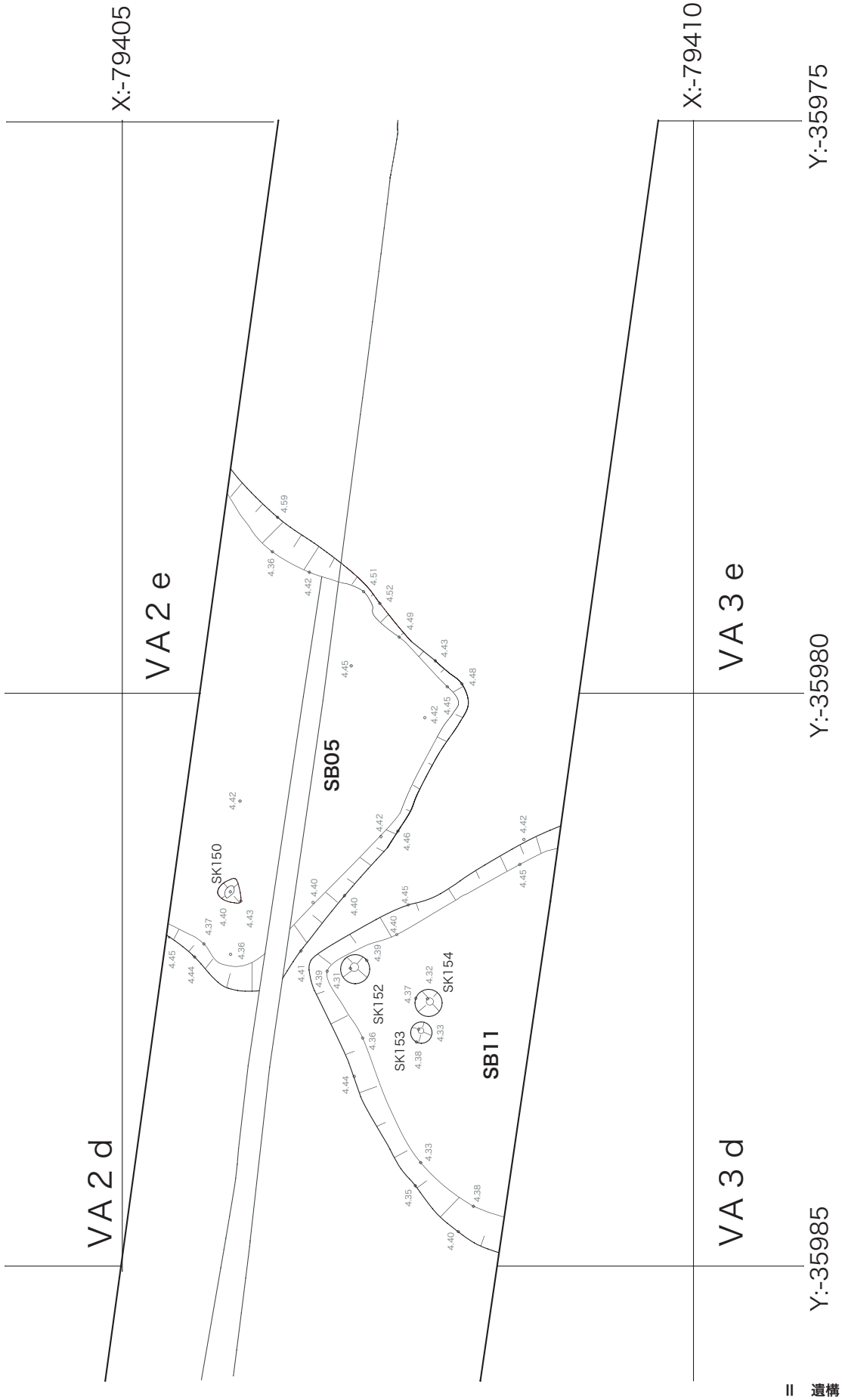


図８　第２面遺構図 (3) １：50

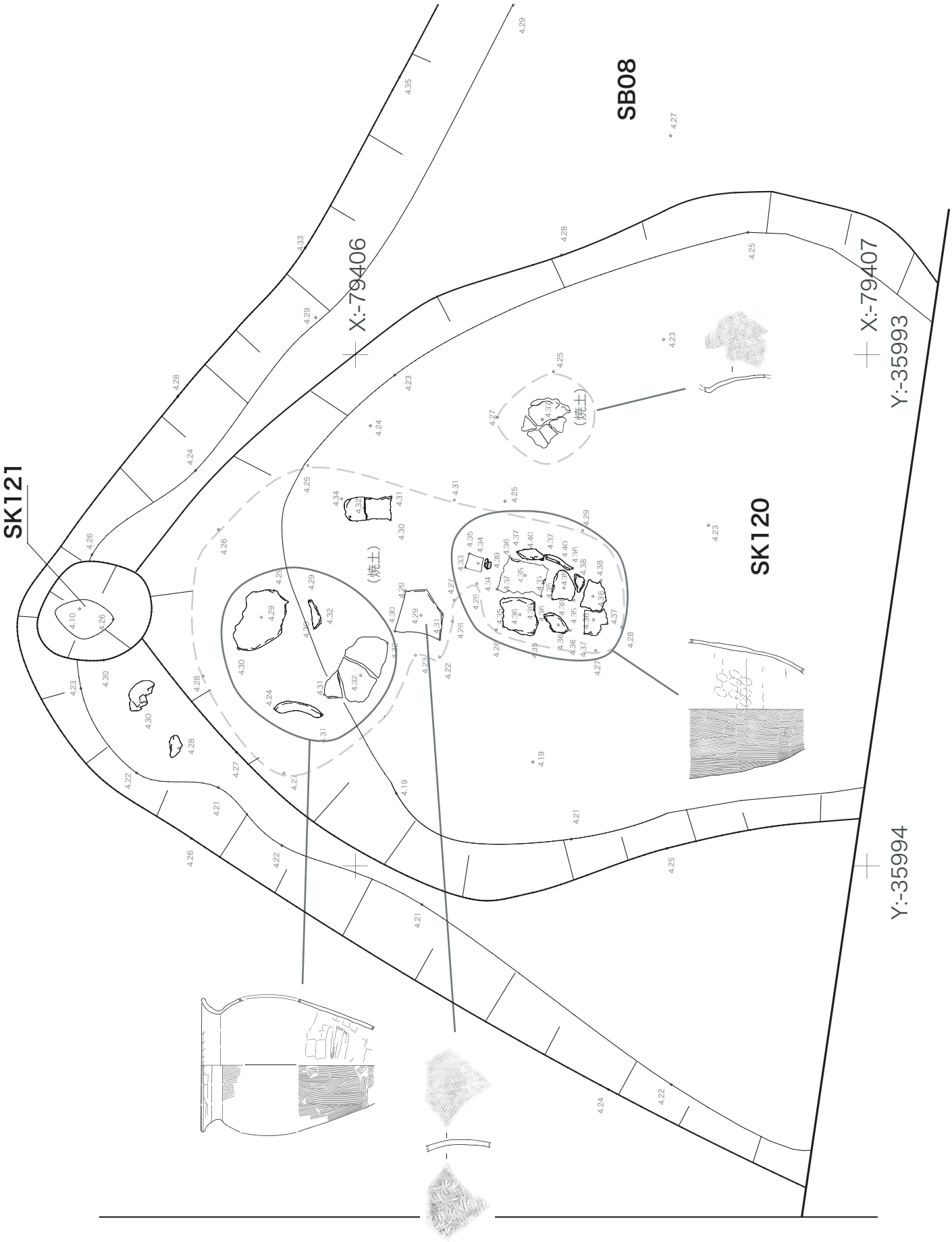
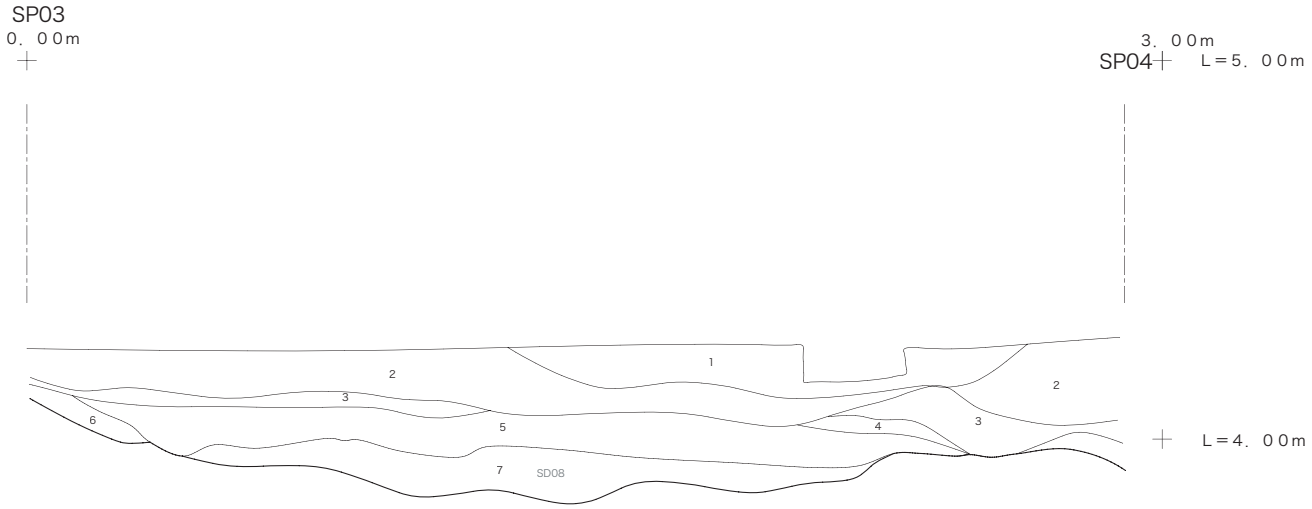


図９　SK120 土器出土状況 1：10

３．第３遺構面（図 10）

第３面の遺構は竪穴住居 SB13 と溝 SD08、土坑 SK183 ～ 186 で、第２面の SB01 ～ 12 の下層で検出した。SB13 は調査区を縦断する土層断面図（遺構図版 13）で確認する限り、古墳前期初頭に属する他の竪穴住居と掘り込み面は変わらないが、遺構の重複関係から集落の変遷では古い段階に位置づけることができる（図 3）。一辺が 5.25m と、今回検出した竪穴住居のなかでは最も規模が大きな部類にはいる。埋土中から、廻間 I 式期後半～ II 式期前半の土器（図 11-14・15）が出土している。

SD08 は調査区の西端に位置する南北方向の溝である。幅は約 4m で、深さは検出面から 25cm 程度を測る。調査区北壁付近では北東から南西に走り、調査区内で約 60°東に折れ曲がる。土層断面図（図 10・遺構図版 13）でみる限り、西側の肩は比較的明瞭で、地形的にも西側へさらに高くなっている傾向が読みとれるが、東側の肩に関してはきわめて不明瞭である。この溝が機能していた当時の地表面は遺構図版 13 の土層 37・38 の上面と考えられることから、同一遺構面で検出した SB13 よりも時期的に古くなることは確実である。ただし、土層 37 は当初から地形的に高かった VA2g 周辺でもベース面であることから、第２遺構面で検出した竪穴住居群の東側に展開する第１遺構面の土坑群のいくつかとは同時期の可能性がある。埋土中からは、廻間 I 式期後半～ II 式期前半の土器が出土しており（図 13-33 ～ 37）、他の遺構とは遺物のうえでの時期差はほとんど認められない。



1．10YR3/1黒褐色粘土、10YR7/2にぶい黄橙色細粒砂斑入
2．2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト、炭化物少量含む。ややしまる。
3．2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト、炭化物大量に含む
4．5YR5/4にぶい赤褐色細粒砂（焼土）
5．5Y5/2灰オリーブ色細粒砂、炭化物含む
6．5Y6/2灰オリーブ色細粒砂
7．5Y6/2灰オリーブ色細粒砂、炭化物少量含む

点名	X座標	Y座標	標高
SP03	-79405.612	-35990.612	4.239
SP04	-79407.088	-35993.108	4.269

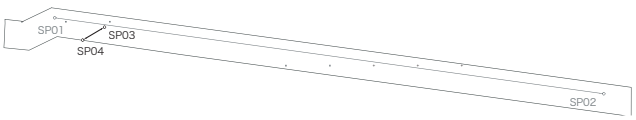


図 10　SD08 土層断面図 1：40

出土遺物の概要

南木戸遺跡からは、古墳前期初頭・古代・中世・近世の土器・陶磁器と木製品が出土している。このうち、中世・近世の土器・陶磁器に関しては、いずれも細片で実測不能であったため、ここでは古墳前期初頭・古代の土器と、古代・中世の木製品についてのみ記述をおこなう。ただし、実測可能であった古墳前期初頭の土器のうち、いくつかはあきらかに中・近世の遺構から出土しているため、遺物の記述に関しては、あらかじめ時期区分をおこなわず、遺構番号にしたがって進めていく。なお、法量・色調・残存率などは付属 CD-ROM の遺物一覧表に記載した。

1．土器

SB01（図 11-1 ～ 7）

1・2 は土師器の高杯脚部。3 は土師器の壺胴部上半。4 はパレススタイル壺の底部である。5・6 は S 字状口縁台付甕の口縁部で、いずれも赤塚分類 * による A 類に属する。7 は同じく S 字状口縁台付甕の胴部下半から脚部で、非常に大型である。いずれも廻間 I 式期のなかでおさまる資料である。

SB03（図 11-8）

8 は土師器の椀形高杯脚部で、外面に櫛描きによる直線紋をほどこす。時期は廻間 I 式期。

SB05（図 11-9）

9 は同じく土師器の椀形高杯杯部で、口縁部外面に櫛描き直線紋をほどこす。廻間 I 式期。

SB06（図 11-10 ～ 12）

10 は土師器の椀形高杯杯部で、口縁端部に内傾面をもつ。11 は土師器の高杯あるいは器台の脚部で、ほとんど内彎せず、端部に幅広の面をもつ。12 は土師器の台付甕口縁部。やや内彎傾向で、端部は細くすぼまる。いずれも廻間 I 式期の範疇で捉えられる資料である。

SB12（図 11-13）

13 はパレススタイル壺の頸部である。外面には竹管による刺突と櫛描きによる直線紋をほどこし、口縁部内面はベンガラで赤彩する。廻間 I 式期。

SB13（図 11-14・15）

14 は土師器の高杯脚部。15 は同じく土師器高杯の杯部である。外面には櫛と刺突で紋様を描く、いわゆる西濃型有稜高杯である。時期は廻間 I 式期後半～ II 式期前半に属する。

SK30（図 12-16）

16 は土師器高杯の杯部。口縁部内面に櫛描き直線紋をほどこす。廻間 I 式期。

SK49（図 12-17）

同じく土師器高杯の杯部で、内面全体に櫛描き直線紋をほどこす。廻間 I 式期。

SK53（図 12-18）

土師器の有段口縁台付甕の口縁部で、廻間 I 式期に属する。

SK59（図 12-19）

S 字状口縁台付甕の口縁部で、A 類に属する。廻間 I 式期。

SK77（図 12-20）

土師器の二重口縁壺で、いわゆる柳ヶ坪型壺とよばれるものである。時期は他の土器群よりも新しく、廻間 III 式期後半～松河戸 I 式期に属する。

SK120（図 12-21 ～ 25）

21・22 は須恵器の甕で、21 が口縁部、22 は胴部の破片。23 ～ 24 は土師器の長胴甕で、いわゆる伊勢系とよばれる一群である。おおむね 7 世紀後半～ 8 世紀前半におさまる土器群である。

SK143（図 13-26・27）

26 は土師器加飾壺の頸部。27 は S 字状口縁台付甕の脚部である。時期はおおむね廻間 I 式期の範疇でおさまる。

SK147（図 13-28）

28 は須恵器高杯の杯部下半である。時期はおおむね 7 世紀後半～ 8 世紀前半頃とおもわれる。

SK182（図 13-29）

29 は土師器の小型台付甕である。単純口縁で、脚部はハの字状に大きく開く。時期は廻間 I 式期頃とみられる。

＊　赤塚次郎 1990「V-2　土器・土器群の形成」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 10 集
なお、古墳前期の土師器の所属時期については、赤塚次郎氏のご教示を得た。

SD01（図 13-30 ～ 32）

30 は S 字状口縁台付甕 A 類の口縁部。31 は須恵器杯 B の蓋で、おおむね高蔵寺 2 号窯式期に属する。32 は伊勢系の土師器長胴甕。SD01 の所属時期は 30 を除き、8 世紀初頭頃とみられる。

SD08（図 13-33 ～ 37）

33 ～ 35 は土師器高杯の脚部。36 は西濃型有稜高杯の脚部。SD08 埋没後に掘削された土坑 SK121 から同一個体の破片が出土しており、接合した。37 は S 字状口縁台付甕の脚部である。36 は廻間 I 式期末～ II 式期前半で、他はおおむね廻間 I 式期のなかでおさまる。

NR01（図 14-38・39）

38 は須恵器杯 G 蓋で、口縁部内面に返りを有する。岩崎 41 号窯式期頃か。39 は須恵器杯 A。おおむね 7 世紀末～ 8 世紀初頭頃に属する。

検出 I（図 14-40 ～ 52）

40 ～ 43 は土師器高杯。44・45 は同じく土師器の東海系器台。46 はパレススタイル壺の底部で、外面に赤彩が残る。47 は有段口縁の台付甕口縁部。48 は台付甕の脚部。49 は S 字状口縁台付甕の脚部で、46 のみ廻間 II 式期で、他は廻間 I 式期の範疇におさまる。

50 は須恵器の擂鉢。51 は同じく須恵器の杯 A 底部。52 は須恵器の壺底部である。時期は 8 世紀前半頃か。

検出 II（図 14-53・54）

53 は土師器の手づくね土器で、無頸壺である。54 は S 字状口縁台付甕 A 類の口縁部で、時期は廻間 I 式期に属する。

検出 III（図 14-55）

55 は土師器高杯の杯部で、内外面に縦方向のヘラミガキをほどこす。

2．木製品（図 15-1・2）

1 は SK01 からの出土。折敷の底板だが、長辺の片縁のみに立ち上がり部と結合するための樺皮が残り、もう一方の長辺には、図面の上方に突起部を作りだす。後者の側縁の仕上げは折敷として破損したのちに転用した際のものか。鋭い刃物による傷が多数残ることから、まな板あるいは作業台としてもちいられたことがわかる。時期は古代で、樹種はヒノキ。

2 は検出 I からの出土で、箸とおもわれる。先端が細く仕上げられている。樹種はヒノキで、時期は中世以降とおもわれる。

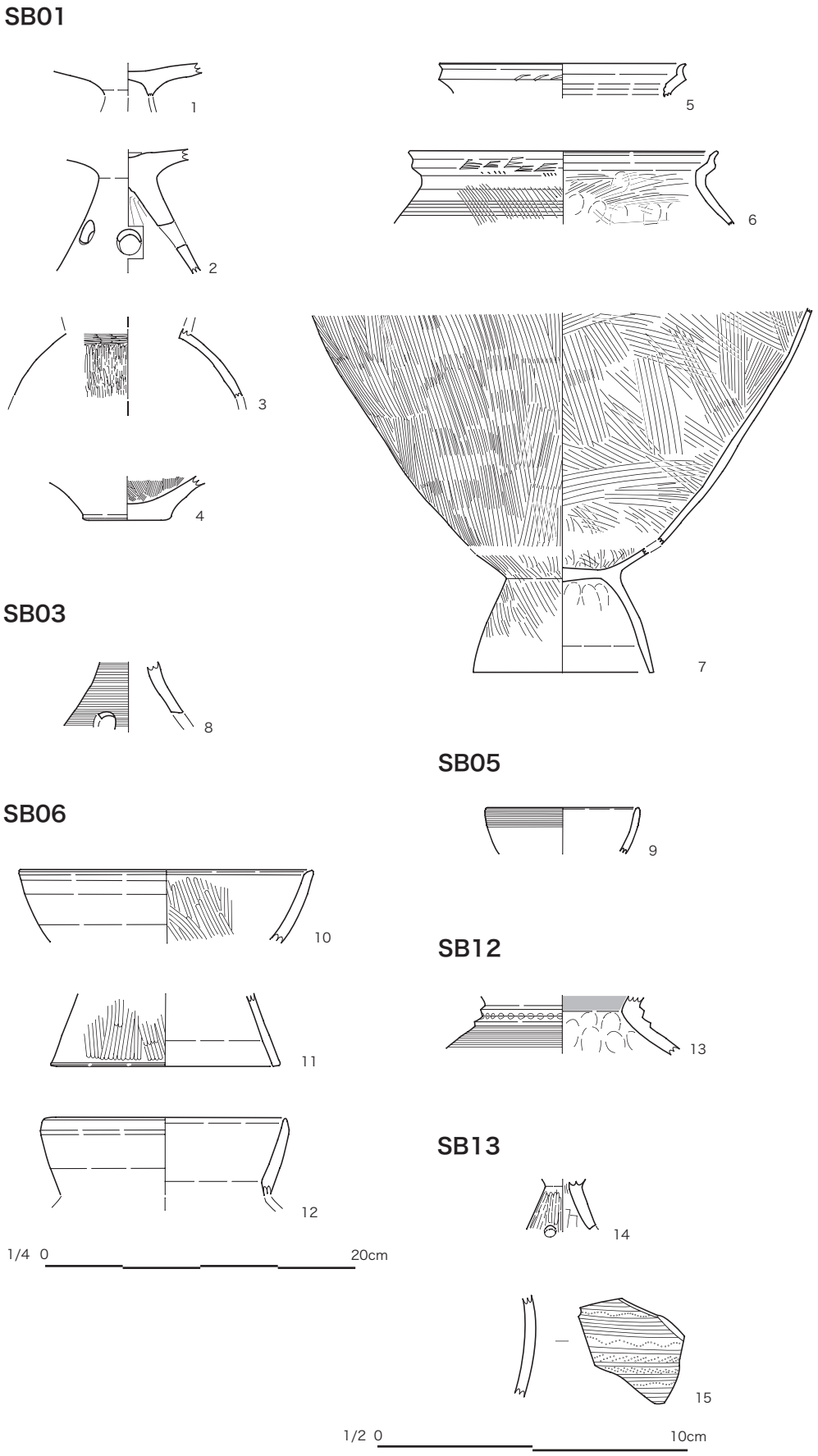


図 11　土器実測図 (1) 1：4／1：2

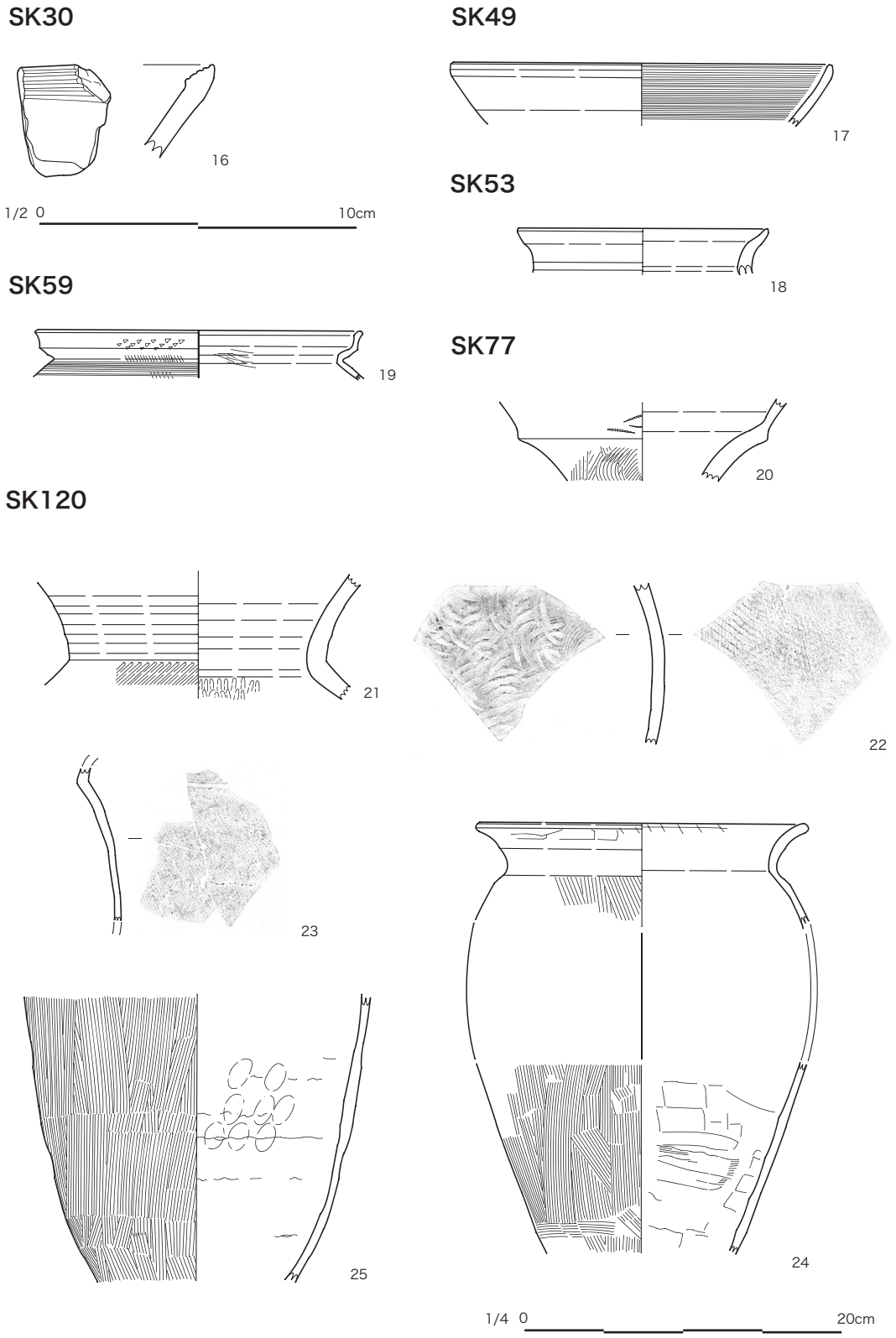


図 12　土器実測図 (2) 1：4／1：2

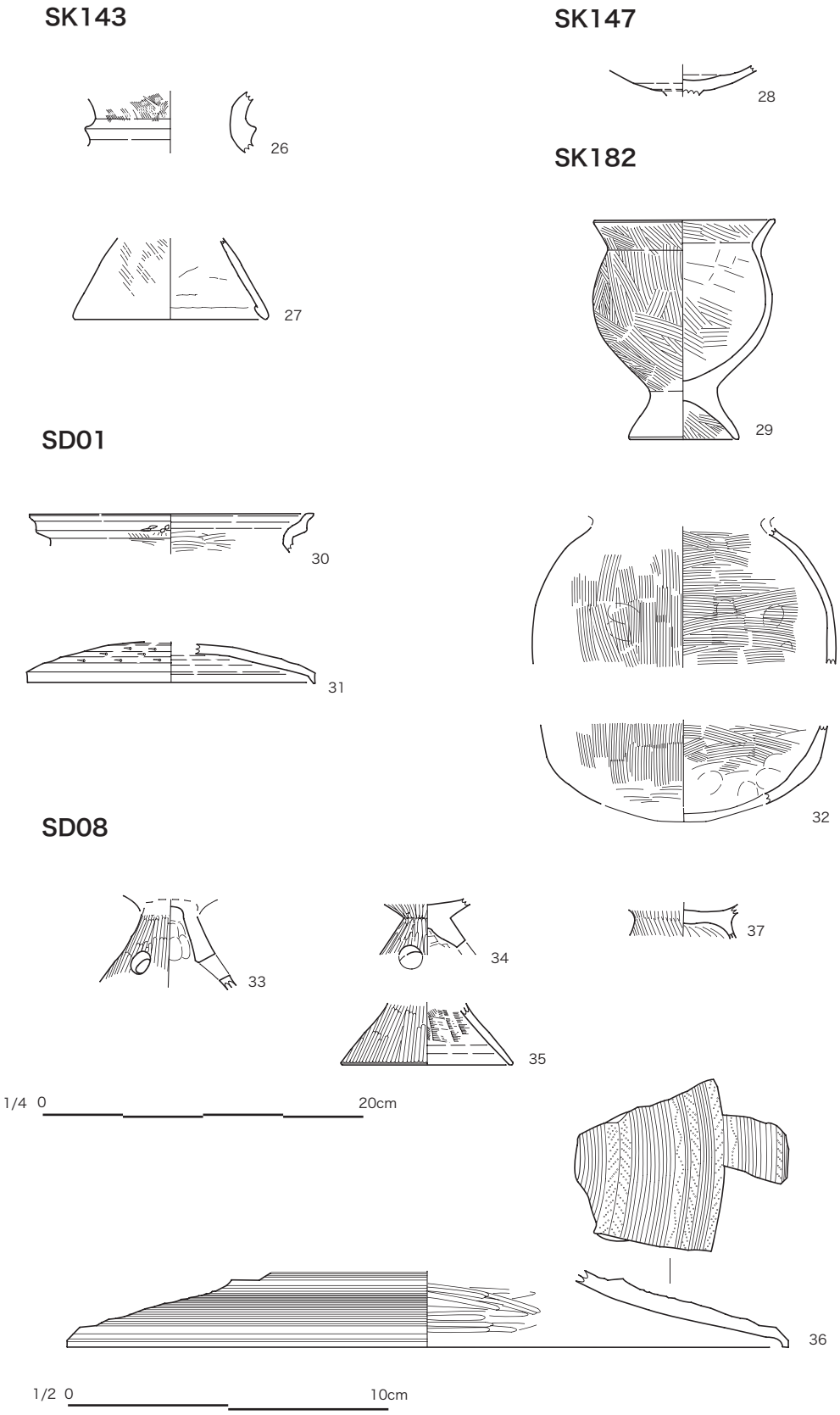
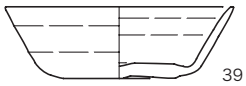


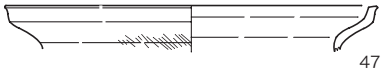
図 13　土器実測図 (3) 1：4／1：2

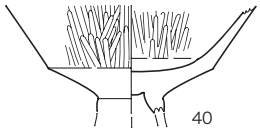
NR01

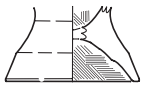

38

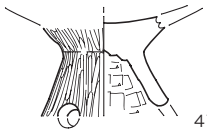

39

検出 I

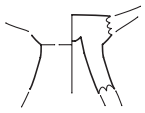

47

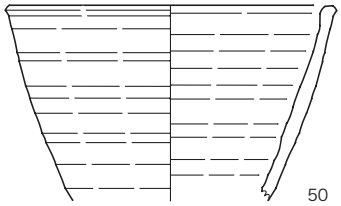

40

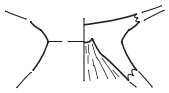

48

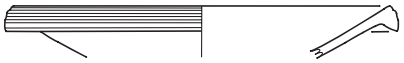

41

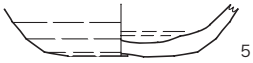

49

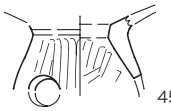

42

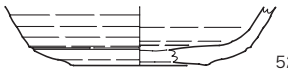

50

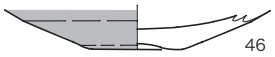

43


44

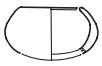

51

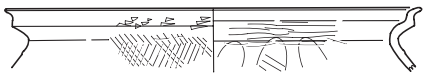

45


52


46

検出 II


53


54

1/4 0 20cm

検出 III

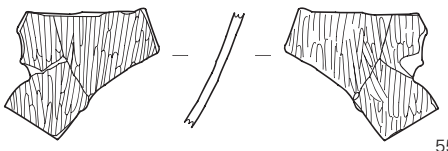

55

図 14　土器実測図 (4) 1：4

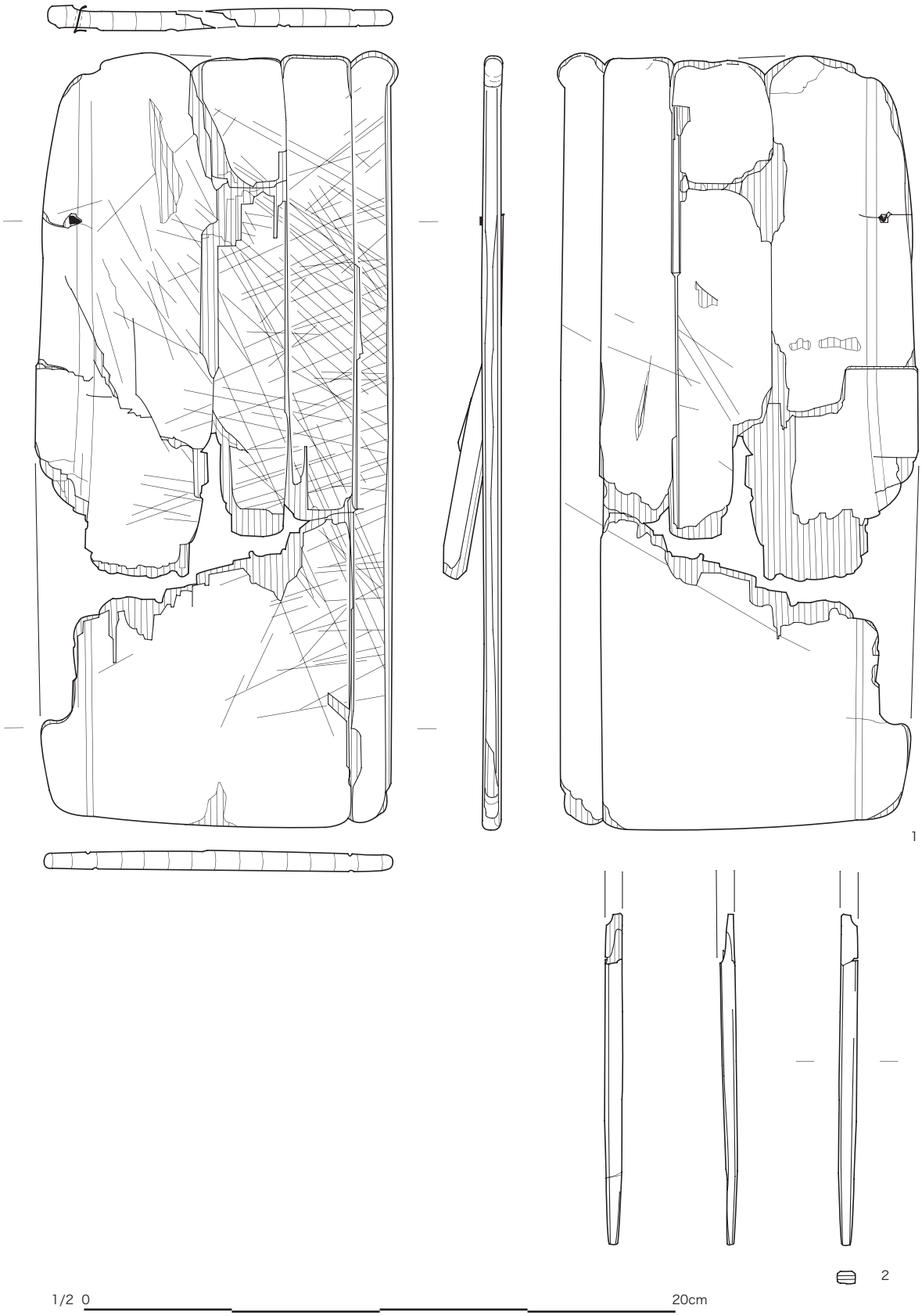


図 15　木製品実測図 1：2

第Ⅲ章　自然科学分析

1．濃尾平野中央部，南木戸遺跡における堆積環境

鬼頭　剛

1．はじめに

濃尾平野中央部に位置する南木戸遺跡調査地点にて地下層序を観察する機会を得た．その層序解析，放射性炭素年代測定および表層地形解析から新たな知見が得られたので報告する．

2．試料および分析方法

南木戸遺跡の地下層序解析のため，調査区において遺構検出面からバックホーにより掘削し，層序断面を露出させ，層序断面図の作成と放射性炭素年代測定の試料を採取した．層序断面図の作成にあたり，層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した．層序断面からは放射性炭素年代測定に有効な植物片や土壌を 9 試料採取した（図 16）．

放射性炭素年代測定は加速器質量分析（AMS）法により測定を行なった．分析方法は 125 μ m の篩により湿式篩別を行ない，篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した．石墨（グラファイト）に調整後，加速器質量分析計にて測定した．測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後，補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した．^{14}C 年代値の算出には，^{14}C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した．^{14}C 年代の暦年代への較正には CALIB4.3 を使用した．測定は株式会社パレオ・ラボ（Code No.; PLD) に依頼した．

調査地周辺における現在の表層地形解析のため等高線図を作成した（図 17）．作成には愛知県一宮市発行の 1/2,500「尾張西部（一宮）都市計画図」にプロットされた標高値を用いた．標高値は 2002 年（平成 14 年）に再測量されたものである．等高線図上には南木戸遺跡の調査地点のほかに，澄田ほか (1967) を参考にして調査地周辺の主要な遺跡をプロットした．

3．分析結果

南木戸遺跡の深掘層序

南木戸遺跡においてバックホーにより地表面（標高 5.31m）から深度約 3.8m までの地下層序断面を得た（図 16）．下位層より，標高 1.50 ～ 1.70m までは黒褐色を呈する未分解の葉片や茎といった植物遺体が集積した腐植層である．基質にはシルトが含まれ，集積した腐植はラミナ状に薄くはがすことができる．標高 1.70 ～ 3.84m は全体にシルト質砂層ないし砂質シルト層からなる．下位層との境界は明瞭で，本層中に含まれる砂やシルト成分の含有量により上部と下部にわけられる．下部にあたる標高 1.70 ～ 2.89m は砂成分の卓越するシルト質極細粒砂層である．砂層中には層理面に対して垂直に，ヨシなどのイネ科植物の茎部にあたると思われる未分解の植物遺体が多く含まれる．生物攪乱により堆積構造はほとんど破壊されている．上部は標高 2.89 ～ 3.84m の砂質シルト層である．シルト成分が卓越することから下部とは区別される．上部にもイネ科植物の茎部にあたると思われる未分解の植物遺体が含

まれるものの，下部に比べるとその密度は低い．上部と下部との境界は不明瞭で，下部から上部へ漸移的に変化する．標高 3.84 ～ 4.09m は青灰色のシルト質粘土層である．下位層の砂質シルト層との境界は明瞭である．粘土成分が卓越し，塊状である．本層下部には，まれに炭化物も含まれる．標高 4.09 ～ 4.16m は黒褐色～褐色を呈する粘土層である．下位層との境界は不明瞭である．塊状で堆積構造はみられない．本層からは古代の考古遺物がみつかっている．標高 3.84 ～ 4.09m でみられる青灰色のシルト質粘土層のブロックを含む．標高 4.16 ～ 4.29m は灰褐色粘土層である．塊状で粘土層中には砂やシルトが混じり，堆積構造は認められない．全体に明褐色を呈しており，酸化の程度は著しい．標高 4.29 ～ 4.41m は砂質シルト層からなる．シルト成分が卓越し，本層も酸化の程度が著しく，明褐色を呈する．中世の考古遺物を含む．標高 4.41 ～ 5.31m は現代の人工的な盛り土である．

放射性炭素年代測定

深掘層序断面から計 9 試料の放射性炭素年代値を得た（表 1）．もっとも下位でみられる腐植層（標高 1.50 ～ 1.70m）の標高 1.51m から採取した植物片は 2325, 2215 cal yrs BP(PLD-2185）であった．標高 1.70 ～ 3.84m のシルト層～砂層では，たとえば標高 2.66m から得た有機質土壌は 4775, 4605, 4570, 4555, 4550　cal yrs BP(PLD-2937）を，標高 3.55m から採取した有機質土壌は 3865, 3850, 3845 cal yrs BP(PLD-2932）を示し，おおよそ 3800 ～ 4700 年前の数値年代を示した．上位層では標高 4.09 ～ 4.16m の黒褐色～褐色粘土層の標高 4.10m で採取した有機質土壌が 1885　cal

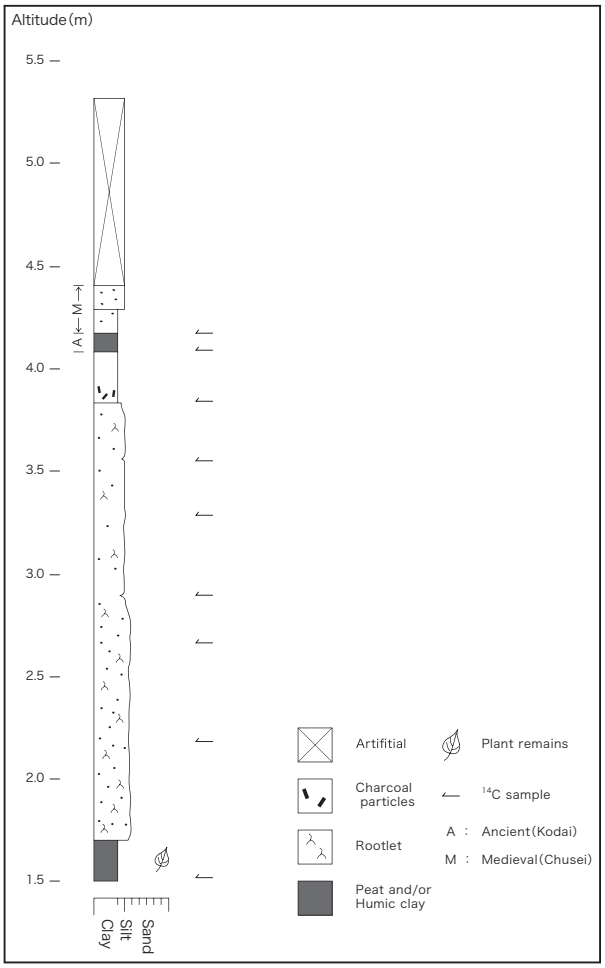


図 16　南木戸遺跡 03 区における深掘柱状図

矢印は放射性炭素年代測定の資料採取層準を示す．

表 1　南木戸遺跡 03 区深掘の放射性炭素年代測定結果

標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C年代 (yrs BP)	δ^{13}CPDB (‰)	暦年代較正値 (1σ, cal BC/AD)	暦年代較正値 (1σ, cal yrs BP)	1σ暦年代範囲 (cal BC/AD, probability)	1σ暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No.(method)
1.51	黒褐色腐植層	植物片	2260±30	-25.8	BC 375,265	2325,2215	BC 385-355(46.4%) BC 290-255(38.2%) BC 245-235(14.4%)	2335-2305(46.4%) 2235-2205(38.2%) 2195-2180(14.4%)	PLD-2185(AMS)
2.18	シルト質極細粒砂層	有機質土壌	3830±50	-23.2	BC 2285,2245,2240	4235,4195,4190	BC 2400-2380(8.9%) BC 2345-2200(91.1%)	4295-4150(92.4%)	PLD-2936(AMS)
2.66	シルト質極細粒砂層	有機質土壌	4100±45	-26.0	BC2655,2650,2620,2605,2600	4775,4605,4570,4555,4550	BC 2855-2815(25.3%) BC 2735-2730(3.1%) BC 2695-2575(71.6%)	4645-4525(72.0%) 4805-4760(25.7%)	PLD-2937(AMS)
2.89	砂質シルト層	有機質土壌	4015±45	-23.4	BC 2560,2525,2495	4510,4485,4480,4475,4445	BC 2575-2510(68.6%) BC 2505-2470(31.4%)	4520-4460(67.8%) 4450-4420(32.2%)	PLD-2938(AMS)
3.28	砂質シルト層	有機質土壌	4020±35	-25.7	BC 2565,2520,2495	4515,4470,4445	BC 2575-2545(35.4%) BC 2545-2510(42.6%) BC 2505-2490(17.5%) BC 2480-2475(4.4%)	4525-4460(76.8%) 4450-4435(17.8%)	PLD-2931(AMS)
3.55	砂質シルト層	有機質土壌	3570±40	-24.9	BC 1915,1895,1890	3865,3850,3845	BC 2010-2000(3.8%) BC 1975-1970(4.7%) BC 1965-1880(82.7%) BC 1840-1830(7.7%)	3910-3830(84.8%)	PLD-2932(AMS)
3.85	シルト質粘土層	有機質土壌	3480±40	-24.2	BC 1860,1845,1770	3810,3795,3720	BC 1875-1840(35.0%) BC 1825-1795(28.3%) BC 1780-1745(36.7%)	3730-3690(36.7%) 3825-3790(35.0%) 3775-3745(28.3%)	PLD-2933(AMS)
4.10	黒褐色～褐色粘土層	有機質土壌	1945±35	-20.8	AD 65	1885	AD 25-45(29.0%) AD 45-85(55.4%) AD 105-120(14.7%)	1930-1865(83.4%) 1845-1830(13.9%)	PLD-2934(AMS)
4.18	灰褐色粘土層	有機質土壌	1270±30	-26.5	AD 720,745,770	1255,1230,1205,1185	AD 690-700(14.9%) AD 710-755(62.5%) AD 760-775(22.6%)	1260-1175(100%)	PLD-2935(AMS)

yrs BP(PLD-2934)，標高 4.16 ～ 4.29m の灰褐色粘土層の標高 4.18m から採取した有機質土壌は 1255, 1230, 1205, 1185 cal yrs BP(PLD-2935) であった．

調査地周辺の等高線図

一般に沖積低地では，低地部の単位面積内における高度差がきわめて小さく低平なため，国土地理院発行の地形図（1/25,000 や 1/10,000）には低地面の詳細な等高線はほとんど表現されない．また，一宮市地域には，澄田ほか (1967) により「一宮市内弥生時代遺跡分布図」として考古遺跡の位置を地形図上にプロットしたものがある．しかし，同分布図は国土地理院発行の 1/25,000 地形図「岐阜南部・一宮市」を基としているため，たとえば南木戸遺跡の調査地点周辺には標高 5.0m の等高線が描かれるのみであり，考古遺跡を解析するのに適当な精度とは言い難い．そのため筆者は，より詳細な等高線図を得るため愛知県一宮市発行の 1/2,500「尾張西部（一宮）都市計画図」を用い，等高線図を作成した（図１７）．なお，等高線間隔は 0.2m である．

東西約 1.6km，南北約 1.5km の等高線図全体では標高 3.4m から標高 6.2m までの等高線が描かれ，北側で標高が高く，南側へ向かい徐々に低くなる傾向がある．標高 5.0m ラインを基準とすると判別しやすいが，調査地域周辺には低平ながらも尾根部と，谷部あるいは凹地がそれぞれ認められる．尾根について，まず図の中央部（河田方付近）に標高 4.8 ～ 5.6m までの，南北方向に細長くのびる尾根部が認められる．この尾根の標高 5.4m と標高 5.6m の間には平坦地があり，本地点には弥生時代遺跡である苗代遺跡 (澄田ほか , 1967）が位置している．図の中央部から西方（萩原付近）の東西方向に標高 4.6 ～ 5.0m の尾根部がみられ，尾根の南側縁辺部に弥生時代遺跡の河田遺跡（澄田ほか , 1967）が位置する．図の北西側（名鉄尾西線付近）にも南北ないし東西方向に標高 4.6 ～ 6.0m までの尾根部が認められる．

つぎに谷部についてみると，南木戸遺跡調査地点の南側近傍には標高 4.4 ～ 5.2m まで徐々に標高が低くなる東西約 550m，南北約 280m の逆 U 字形で等高線の閉じた，閉曲線からなる凹地が認められる．図の東側（林野付近）にも標高 3.4 ～ 5.6m に東西約 640m 以上，南北約 1300m 以上を有する凹地がある．これらはともに閉曲線の形態をとるため，沼沢地といった環境が推定できる．また，図の北西側，標高 4.6m から 5.2m までの尾根部にはさまれて北東 - 南西方向で南西方向に開いた谷（萩原付近）がみられる．

４．考察

南木戸遺跡の深掘層序に記録される堆積環境

濃尾平野の上部更新統～完新統は上部更新統である熱田層を不整合に覆い，更新統最上部の第一礫層および濃尾層と，完新統の南陽層とに区分される（古川 , 1972 ; 松澤・嘉藤 , 1954）．さらに南陽層は下位より中部粘土層，上部砂層，最上部粘土層に細分される．また，自然地理学的には完新統の最上部粘土層を沖積陸成層ともよぶ（井関 , 1962 ; 海津 , 1979）．南木戸遺跡の深掘層序断面でみられた堆積層序は地質学的には南陽層上部層の最上部粘土層にあたり，自然地理学でいう沖積陸成層にあたる．

深掘層序断面のその粒度組成と層相から次のような堆積環境が推定される．もっとも下位でみられた黒褐色腐植層はほとんど分解されることなく集積した植物遺体からなり，砂粒子をまったく含まない．いっぱんに，植物片は地表面のような酸素の多い好気的な環境下では，腐朽菌といった微生物により速やかに分解される．植物組織を残したまま良好に保存されるためには，微生物が活動できない嫌気的な環境におかれる必要がある．つまり，本層は微生物活動をうわまわるほど速やかに埋積されたか，水深の深い嫌気的な環境下で堆積したと考えなければならない．よって，比較的水深のある後背湿地や河跡湖堆積物と推定される．本層の標高 1.51m から採取した植物片は 2325, 2215 cal yrs BP(PLD-2185）を示した．約 2200 年前には調査地点は上記のような環境で

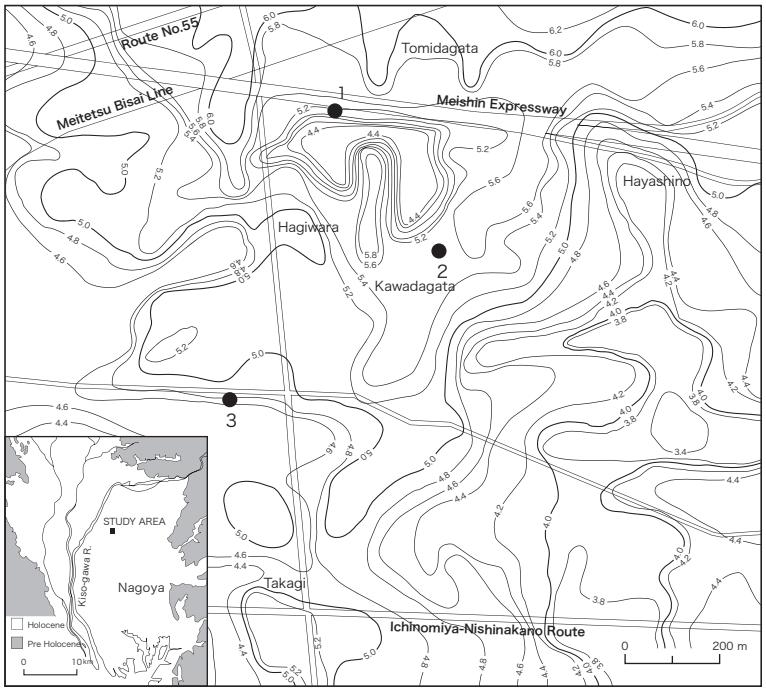


図 17　南木戸遺跡調査地域の現在の等高線図

黒丸（●）は調査地点と周辺の遺跡を示す．

1．南木戸遺跡，2．苗代遺跡，3．河田遺跡

等高線（m）は愛知県一宮市発行の「尾張西部（一宮）都市計画図（1：2,500）」の標高値を参考に筆者が作成．

Tomidagata：富田方，Hayashino：林野，Kawadagata：河田方，Hagiwara：萩原，Takagi：高木

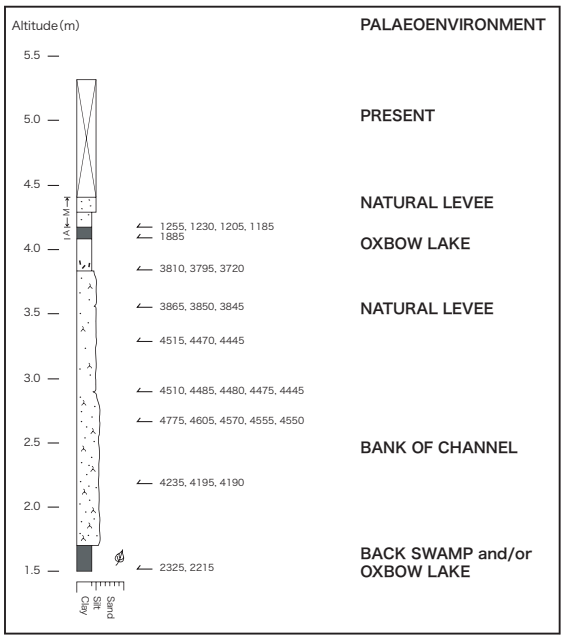


図 18　南木戸遺跡 03 区深掘層序より推定される堆積環境

あった．

標高 1.70 ～ 3.84m にみられる厚いシルト質砂層ないし砂質シルト層には，層理面に対して垂直にイネ科植物の茎部が埋積されている状況が観察された．現世河川の観察では，イネ科植物は河川縁辺で水理エネルギーのより小さなところで生育し，本流からは側方に隔たった流路縁辺に繁茂する．このことから，標高 1.70m を境として調査地点は河川流路の縁辺的な堆積環境であったと推定される．なお，主流路が調査地点の北ないし南側のどちらに存在したかは不明である．その堆積年代について，標高 2.66m から得た有機質土壌は 4775, 4605, 4570, 4555, 4550 cal yrs BP(PLD-2937）を，標高 3.55m から採取した有機質土壌は 3865, 3850, 3845 cal yrs BP(PLD-2932）を示し，おおよそ 3800 ～ 4700 年前の数値年代を示した．ところが，本層よりも下位でみられる腐植層では約 2200 年前という新しい数値年代を得ている．上位層よりも下位層の方が新しく，あきらかに年代値の逆転が生じている．これに関して，南木戸遺跡の調査地点から北東約 1.5km にある一宮市大和町苅安賀の八王子遺跡（樋上編，2001) では，標高 0.0 ～ 1.0m に黒色粘土層がみられ，本層の標高 0.0m の有機質土壌で 4330 ± 80 yrs BP(Gak-19683)，標高 1.0m の有機質土壌で 3870 ± 80 yrs BP(Gak-19682) の年代値を得ている（鬼頭ほか，2001）．このように，南木戸遺跡からみれば上流側にあたる地点（八王子遺跡）で約 4000 年前前後の年代値をもつ粘土層の存在がわかっている．それらの粘土層を浸食・掘削して，南木戸遺跡の調査地点へ二次的にもたらされたために年代値の逆転が生じたものと解釈できる．

標高 3.84 ～ 4.29m には，それまでの下位層

が砂粒子の卓越する層相であったこととは対照的に，シルト質粘土層や粘土層といった細粒堆積物がみられる．粘土は塊状であり，砂粒子を含まない．このことから本層堆積時には河川流路は側方へ移動し，主流路は調査地点付近から離れていたものと思われる．調査地点は細粒堆積物がたまるような比較的水深のある止水域であった．表層地形解析では調査地点の南側に凹地形が確認されることから，河跡湖的な沼沢地環境であったと推定できる．標高 4.09 ～ 4.16m の黒褐色～褐色粘土層の標高 4.10m から採取した有機質土壌が 1885 cal yrs BP(PLD-2934)，標高 4.16 ～ 4.29m の灰褐色粘土層の標高 4.18m から採取した有機質土壌は 1255, 1230, 1205, 1185 cal yrs BP(PLD-2935) の年代値であったことから，少なくとも約 1800 年前から約 1200 年前までにかけては, そのような沼沢地的な止水域であった．

標高 4.29 ～ 4.41m になると砂質シルト層へと層相は変化し，砂粒子を含むようになる．本層の堆積時には，それまで調査地点からは離れていた河川流路がふたたび近傍に移動してきたため，調査地点に砂粒子をもたらしたと推定される．本層からは中世の考古遺物が検出され，生物撹乱により堆積構造はまったく破壊されている．先にも述べたが，下位層では標高 4.18m で約 1200 年前の年代値が得られていることから，約 1200 年前以降から生物活動が活発な好気的な環境にある自然堤防へと変化した（図 18）．

南木戸遺跡の地理的位置の重要性

南木戸遺跡の層序は標高 1.70 ～ 2.89m でみられるシルト質極細粒砂層を覆って，その上を砂質シルト層からシルト質粘土層，そして粘土層へと，上位層になるにしたがって次第に粒度が細かくなる上方細粒化傾向が認められた．確認されたこのような地下層序の特徴に関して，1962 年（昭和 37 年）の名神高速道路の建設工事の際に，今回の調査地点近傍の一宮市河田方高架橋地点においてその層序が記載されている（澄田ほか , 1967）．それによると，最下位層には層厚約 60cm 以上の白色～青色を呈する粗粒砂層（澄田ほか (1967) の記載では粗砂層），層厚約 80cm の青色を呈する細粒砂層（澄田ほか (1967) の記載では細砂層），層厚約 10cm の青色粘土層，層厚約 40cm の赤褐色腐植土層，層厚 20cm の褐色粘土層，層厚約 20cm の耕作土層が覆うと報告した．下位の砂層からはじまり，さらにその上を粘土層が堆積するという上方細粒化傾向を示しており，今回の南木戸遺跡とほとんど同じ傾向であった．これは，今回の調査地点で確認された層序解析の結果が，調査地点周辺に普遍的に確かめられることを意味する．層序解析結果から約 2200 年前以降の堆積環境の変化がとらえられ，後背湿地ないしは河跡湖的な環境から，調査地点近傍に活動的流路が移動してきたことにともない河川流路縁辺部となった．そこで厚い砂層と砂質シルト層を上方へ累積させ，その直上には河跡湖的な止水域が出現した．河跡湖は細粒な粘土により埋積された後，砂粒子を含むシルトからなる自然堤防へと変化したことがわかった．

ところで，濃尾平野における南木戸遺跡の位置は伊勢湾にそそぐ木曽川河口から約 30km 北で，平野のほぼ中央部にあたる（図 17）．この位置は考古学そして自然地理学上たいへん重要である．たとえば, 考古学的に南木戸遺跡の北側約 0.6km にある一宮市萩原町の山中遺跡は，大参 (1968) により主に愛知県と三重県の伊勢湾西側沿岸地域の弥生時代後期文化を示す「山中式」が設定されたタイプ・ロカリティーである．また，山中遺跡をはじめ今回の南木戸遺跡や苗代遺跡，二夕子遺跡，河田遺跡など多くの遺跡が一宮市萩原地域にあることから，萩原遺跡群としてまとめられる場合もある（赤塚 , 1992).

また，自然地理学分野では，濃尾平野における約 6500 ～ 5500 年前ころのいわゆる縄文海進高頂期（最高海水準期）の古地理について，井関 (1975)・海津 (1979) は中部泥層やその相当層の分布状態にもとづいて内湾最拡大期の海岸線を，名古屋市西部を通り，愛知県西春日井郡清洲町・同稲沢市・同尾西市・岐阜県羽島市・同大垣市南部を結ぶ線にほぼ相当するものとした．海岸

線を推定するにあたってその拠りどころとなったのが，南木戸遺跡の北西約 2.4km にある愛知県尾西市の縄文時代後期の板倉貝塚であった．板倉貝塚は標高 5.0m の現地表面から約 4.0 ～ 4.5m 下の埋積谷（井関 (1975) では埋積浅谷と記載）に土器片とともにハマグリ・カキなどの海生貝殻片が出土したとある．縄文海進高頂期の海岸線を推定する際の陸側と海側との境界が今回の調査地点周辺に想定され，たいへん重要な位置にあたるのである．

このように，南木戸遺跡は考古学そして自然地理学的にもきわめて重要な地点と考えられ，データも蓄積されてきている．いっぽう，地質学的に提示できるデータはきわめて少ない．南木戸遺跡や苗代遺跡では，一宮市西部の他の遺跡にくらべて多くの出土木製品が報告されている（澄田ほか，1967; 樋上 , 2004）．木製品が多量に出土した理由として，本論の層序解析と表層地形解析結果で述べたように，古代の考古遺物が確認された黒褐色～褐色粘土層（標高 4.09 ～ 4.16m）は沼沢地的な止水環境が推定でき，微生物活動を妨げる嫌気的な環境が関与している可能性も指摘できる．しかし，南木戸遺跡についての地質学的データはまだ今回の 1 地点のみであり，今後の新たなデータの蓄積が望まれる．

謝辞

本論を作成するにあたり，放射性炭素年代測定では株式会社パレオ・ラボ東海支店の山形秀樹氏にお世話になった．愛知県埋蔵文化財センター調査研究員の樋上　昇氏には南木戸遺跡の考古学的情報と，周辺遺跡に関わる文献をご紹介いただいた．同調査研究員の早野浩二氏には現場での試料採取をお手伝いいただいた．同調査研究員の永井宏幸氏には東海地域の弥生時代文化についてご教示いただいた．図面のトレース作業では同研究補助員の山口典子氏，分析試料の整理・保管と原図の作成では同整理補助員の服部久美子氏・村上志穂子氏にお手伝いいただいた．記して厚くお礼申し上げます．

文献

赤塚次郎 , 1992, 山中式土器について , 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 40 集「山中遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター , 114-127.

古川博恭 , 1972, 濃尾平野の沖積層 - 濃尾平野の研究 , その 1-, 地質学論集 , 7, 39-59.

樋上　昇編 , 2001, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 92 集「八王子遺跡　報告編」, 愛知県埋蔵文化財センター , 268p.

樋上　昇 , 2004, 南木戸遺跡 , 平成 15 年度愛知県埋蔵文化財センター「年報」, 愛知県埋蔵文化財センター , 8.

井関弘太郎 , 1962, 沖積平野研究の基礎的問題点 , 名古屋大学文学部研究論集 , XXVI, 51-74.

井関弘太郎 , 1975, 自然 , 新修稲沢市史　研究編 3（地理）, 稲沢市 , 1-67.

鬼頭　剛・堀木真美子・尾崎和美 , 1999, 馬引横手遺跡の古環境復元 , 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 84 集「馬引横手遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター , 61-79.

鬼頭　剛・堀木真美子・吉野道彦・上田恭子 , 2001, 濃尾平野中央部，八王子遺跡における古環境変遷 , 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 92 集「八王子遺跡　報告編」, 愛知県埋蔵文化財センター , 227-248.

松澤　勲・嘉藤良次郎 , 1954, 名古屋付近の地質 , 同地質図 , 愛知県 , 35p.

大参義一 , 1968, 弥生式土器から土師器へ - 東海地方西部の場合 -, 名古屋大学文学部研究論集 XLVII 史学 16, 名古屋大学文学部 , 65-98.

澄田正一・大参義一・岩野見司 , 1967, 新編一宮市史資料編二 , 一宮市 , 124p.

海津正倫 , 1979, 更新世末期以降における濃尾平野の地形発達過程 , 地理評 , 52, 199-208.

海津正倫 , 1988, 濃尾平野における縄文海進以降の海水準変動と地形変化 , 名古屋大学文学部研究論集　史学 34, 285-303.

2. 南木戸遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定

山形 秀樹（株式会社　パレオ・ラボ）

1．はじめに

南木戸遺跡より検出された炭化材の加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を実施した。

2．試料と方法

試料は、SB02 より採取した炭化材（ハンノキ亜属）1 点、SB03 より採取した炭化材（ヒノキ属）1 点、SB10 より採取した炭化材（ヒノキ属）1 点の併せて 3 点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨 (グラファイト) に調整した後、加速器質量分析計 (AMS) にて測定した。測定した ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。

3．結果

表 2 に、各試料の同位体分別効果の補正値（基準値 -25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した ^{14}C 年代、^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C 年代値 (yrBP) の算出は、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 (± 1 σ) は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差 (One sigma) に相当する年代である。これは、試料の ^{14}C 年代が、その ^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が 68% であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5,730 ± 40 年) を較正し、より正確な年代を求めるために、^{14}C 年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚の U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて ^{14}C 年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}C 年代を暦年代に較正した年代の算出に CALIB 4.3(CALIB 3.0 のバージョンアップ版) を使用した。なお、暦年代較正値は ^{14}C 年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、1 σ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその 1 σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10% 未満についてはその表示を省略した。1 σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4．考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した 1 σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎 . 日本先史時代の 14C 年代、p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended 14C Database and Revised CALIB3.0 14C Age Calibration

Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver,M., Reimer,P.J., Bard,E., Beck,J.W., Burr,G.S., Hughen,K.A., Kromer,B., McCormac,F.G., v.d. Plicht,J., and Spurk,M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

表２　南木戸遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号（測定法）	試料データ	$\delta^{13}C_{PDB}$ (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-2490 (AMS)	炭化材（ハンノキ亜属）IIMK03 SB02	-25.2	1,790±30	cal AD 240	cal AD 175 - 190 (10.9%) cal AD 210 - 260 (55.3%) cal AD 300 - 320 (24.6%)
PLD-2491 (AMS)	炭化材（ヒノキ属）IIMK03 SB03	-23.8	1,975±30	cal AD 25 cal AD 45 cal AD 50	cal AD 0 - 65 (96.2%)
PLD-2492 (AMS)	炭化材（ヒノキ属）IIMK03 SB10	-24.1	2,035±30	cal BC 40 cal BC 5	cal BC 55 - cal AD 5 (85.9%)

3. 南木戸遺跡出土炭化材の樹種同定結果

植田弥生（株式会社　パレオ・ラボ）

1．はじめに

ここでは、放射性炭素年代測定を実施した炭化材試料 (SB02・SB03・SB10・SK47)4 点と、古代～中世の木製品 (板材と箸)2 点の樹種同定結果を報告する。

2．試料と方法

炭化材：各試料には複数の破片があったので、形状や大きさの異なる炭化材を選び、実体顕微鏡で横断面を予察したが、試料ごとに同一種類のようであった。樹種同定用の破片は、放射性炭素年代測定に用いた同一破片を使用した。同定は、炭化材の横断面 (木口) を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に材の 3 方向 (横断面・接線断面・放射断面) の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、3 断面を 5mm 角以下の大きさに整え、直径 1 cm の真鍮製試料台に両面テ−プで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡 (日本電子（株）製　JSM-T100 型) で観察と写真撮影を行った。

木製品：木製品から材の 3 方向 (横断面・接線断面・放射断面) を見定めて、剃刀を用い各方向の薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラールで封入し、永久プレパラート (材組織標本) を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で 40 ～ 400 倍に拡大し観察した。

材組織標本は、愛知県埋蔵文化財センターに保管されている。

3．結果

各試料の同定結果を表 3 に示した。

VA2c 区の住居跡 (SB02・SB03・SB10)3 軒から出土した 3 点の炭化材破片は、ヒノキ属 2 点とハンノキ亜属 1 点であった。VA2e 区の土坑 SK47 出土の炭化材破片は、1 年輪幅がなく保存も悪いため、コナラ節かクヌギ節の晩材部と思われるが特定はできずコナラ属？と同定した。

古代～中世の木製品は、柾目の板材はヒノキ、横断面が四角の箸もヒノキであった。

樹種記載 (分類配列順に列記した)

ヒノキ　Chamaecyparis obtuse (Sieb.et Zucc.) Endl. ヒノキ科　図版 2　4a-4c(板材)、5a-5c(箸)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部の量は少ない。分野壁孔は円形で孔口は細いレンズ状、1 分野に主に 2 個が水平に配置している。

ヒノキ属　Chamaecyparis　ヒノキ科　図版 1　1a-1c(SB03)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。分野壁孔の輪郭は丸く、1 分野に主に 2 個ある。

SB03 の炭化材は、分野壁孔の孔口がやや大きく開いていたので、サワラの可能性が高いと思われる。

SB10 の炭化材は、保存が悪く分野壁孔の孔口の詳細はわからなかった。

炭化材では材組織が似る他のヒノキ科やスギの材とは、主に次の点で区別した。同じヒノキ科のネズコは分野壁孔が 2 ～ 6 個で多く、アスナロは分野壁孔がヒノキのそれより小型で数も 2 ～ 4 個とやや多い。スギは分野壁孔の輪郭は大きな楕円形で孔口も大きな楕円形であり壁孔縁の幅は非常に薄いことから区別した。

ヒノキ属は温帯の分布し、本州の福島県以南・四国・九州の山中のやや乾燥した尾根や岩上に生育するヒノキと、ヒノキより分布域は狭く東北南

部から中部地方の沢沿いの岩上に生育するサワラがある。材は耐朽性・切削性・割裂性にすぐれる。

ハンノキ属ハンノキ亜属　Alnus subgen. Alnus　カバノキ科　図版１　2a-2c(SB02)

小型の管孔が放射方向に２～数個複合し多く分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は階段数が 10 ～ 20 本の階段穿孔である。放射組織は単列同性、道管との壁孔は小さく交互状に密在する。横断面において、放射組織の集合帯が見られた。

ハンノキ亜属は暖帯から亜寒帯の陽光地に生育する落葉樹で７種が含まれる。低地の湿地に普通のハンノキ、川岸に生育するカワラハンノキ、山中に生育するミヤマカワラハンノキ・ヤハズハンノキ・ケヤマハンノキなどがあり。材組織からこれらを識別することはできていない。ハンノキとケヤマハンノキは高木になり、材質は硬さ・重さは中庸、切削性に優れるが保存性は低い。

コナラ属？　Quercus ？　ブナ科　図版１　3a-3c(SK47)

保存が悪く小破片のため、１年輪の管孔配列は不明であるが、小型の管孔が単独や２～３個が複合して散在し、接線状や散在状の木部柔組織が顕著であり、放射組織が集合しているような部分が見られた。放射組織は単列同性、道管の穿孔は単穿孔であった。このような組織からコナラ属のコナラ節またはクヌギ節の晩材部の破片と思われる。

コナラ節とクヌギ節は、暖帯から温帯に普通に生育する落葉高木で、コナラ節に属するカシワ・ミズナラなどと、クヌギ節に属するクヌギ・アベマキがある。

４．まとめ

古代～中世の木製品が、板と箸がヒノキであった事は、典型的な樹種利用を再確認できたと言える。板は、薄い柾目板で非常に年輪幅が狭く年輪数も多く、非常に樹齢の多い材木から切り出されてものと思われる。

廻間Ⅰ～Ⅱの住居跡から出土した炭化材樹種は、ハンノキ亜属とヒノキ属であった。住居跡から出土した炭化材であるが、いずれも破片で本来の用途は不明である。ハンノキ亜属の炭化材は、種類を特定できないが、ハンノキ・カワラハンノキ・ケヤマハンノキなど主に湿地や河畔林に生育する種類が多い。おそらく低地に立地する当遺跡では、入手容易な樹木であったといえる。ヒノキ属は、現在の生育環境から類推すると山間部に生育する樹木であるため、搬入された材かも知れないし、住居跡出土材である事からは建築材の可能性が推測される。当遺跡より１Km 北部に位置する八王子遺跡 (一宮市) の弥生時代中期の住居址 (堀木編、2001)、そして濃尾平野西部の自然堤防からその後背湿地に立地する今宿遺跡 (大垣市) の弥生時代後期の住居址 (植田、1998) や扇状地に立地する下西郷一本松遺跡 (岐阜市) の欠山式・廻間Ⅰ式併行～廻間Ⅲ式・松河戸Ⅰ式併行の住居跡 (植田、2002) では、ヒノキ・ヒノキ属・ヒノキ科が優占出土し、スギはほとんど知られていない。従って当遺跡においても、ヒノキ属を建築材に利用していた可能性が類推される。

樋上 (2002) により、近隣の八王子遺跡では廻間Ⅰ式～松河戸Ⅰ式期の木製品で針葉樹材についてはヒノキ科が多く、それに対し一宮市史編さん室 (1967) に掲載されている南木戸遺跡の同時期の木製品には建築材も含めスギが多いという違いが指摘されている。今回の調査により、住居址の炭化材からヒノキ属が検出され、南木戸遺跡でもヒノキ科の材が少なからず利用されていたことが判った。

引用文献

一宮市史編さん室、1967、「南木戸遺跡」、『新編　一宮市史 資料編二』。

堀木真美子 編、2001、「 樹種同定 」、愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第 92 集『八王子遺跡』。

植田弥生、1998、「弥生時代後期の焼失住居跡から出土した炭化材樹種同定」、岐阜県文化財保護センター調査報告書　第 37 集『今宿遺跡 (第２分冊)』。

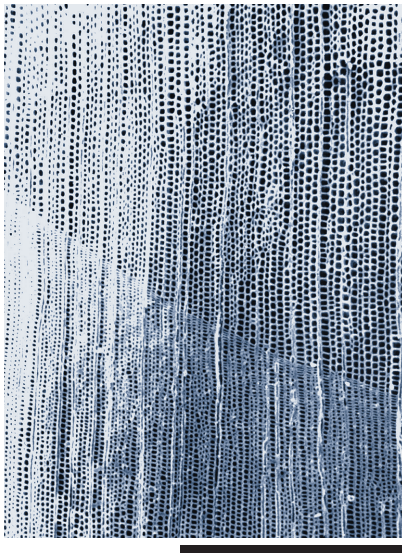
植田弥生、2000、「下西郷一本松遺跡の住居跡出土炭化材樹種同定」、(財) 岐阜市教育文化振興事業団報告書第６集『下西郷一本松遺跡』。

樋上 昇、2002、「樹種からみた尾張地域の木製品」、『考古学フォーラム no.15』。

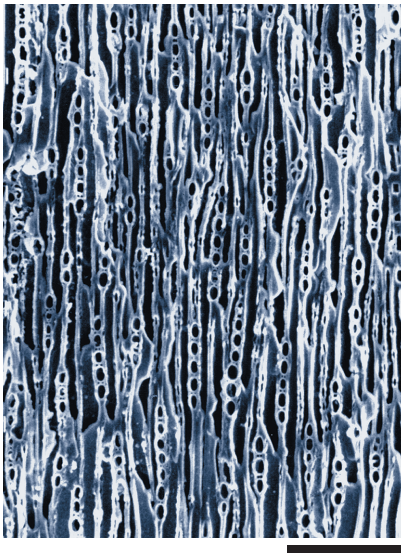
表 3　南木戸遺跡出土炭化材・木製品の樹種同定結果

地区	遺構	試料	樹種	時期	備考
VA2c	SB02	炭化材	ハンノキ亜属	廻間 I～ II (古墳時代初頭)	部位不明破片 PLD-2490
VA2c	SB03	炭化材	ヒノキ属	廻間 I ～ II (古墳時代初頭)	部位不明破片 PLD-2491
VA2c	SB10	炭化材	ヒノキ属	廻間 I ～ II (古墳時代初頭)	年輪幅が非常に狭い材 PLD-2492
VA2e	SK47	炭化材	コナラ属?	廻間 I～ II (古墳時代初頭)	板状破片
	SK01	木製品:板材	ヒノキ	古代	柾目取り板
VA2d	検 I	木製品:箸	ヒノキ	中世	横断面:四角

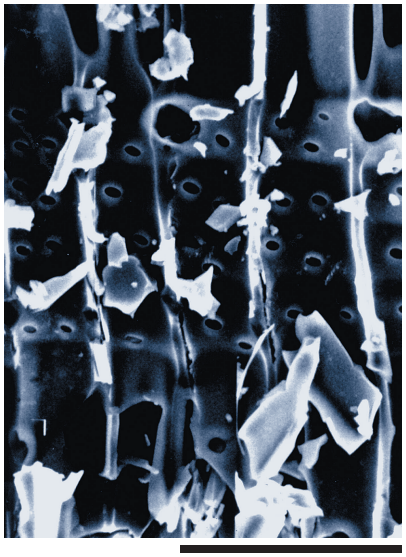
図版１　南木戸遺跡出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真



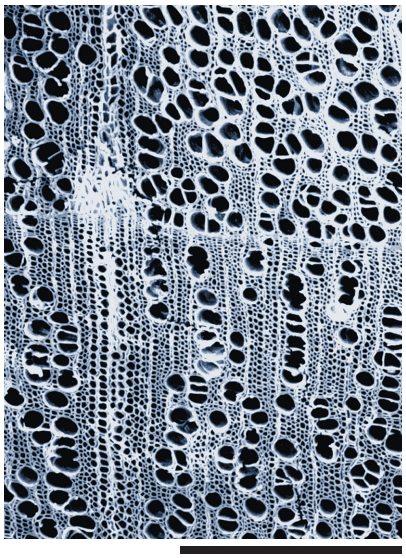
1a ヒノキ属（横断面）
SB03　bar:0.5mm



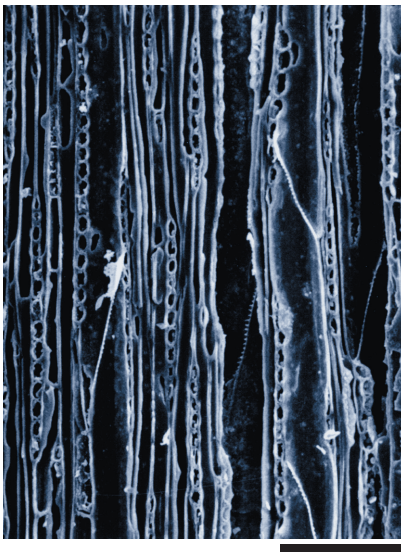
1b ヒノキ属（接線断面）
bar:0.1mm



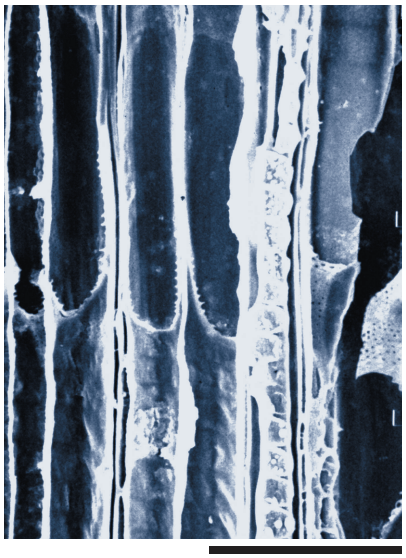
1c ヒノキ属（放射断面）
bar:0.05mm



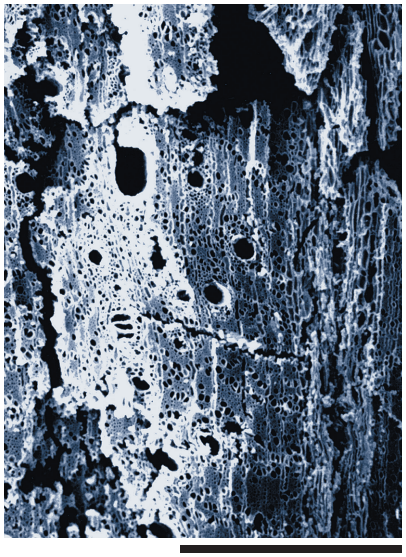
2a ハンノキ亜属（横断面）
SB02　bar:0.5mm



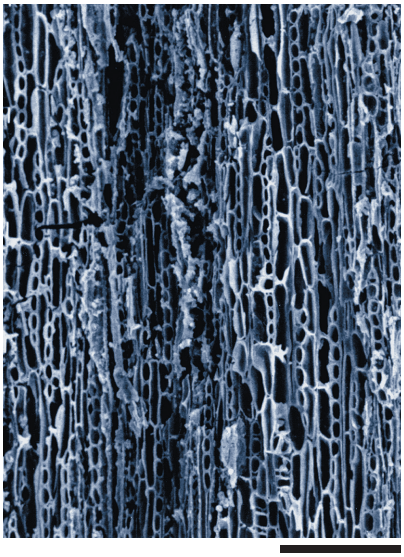
2b ハンノキ亜属（接線断面）
bar:0.1mm



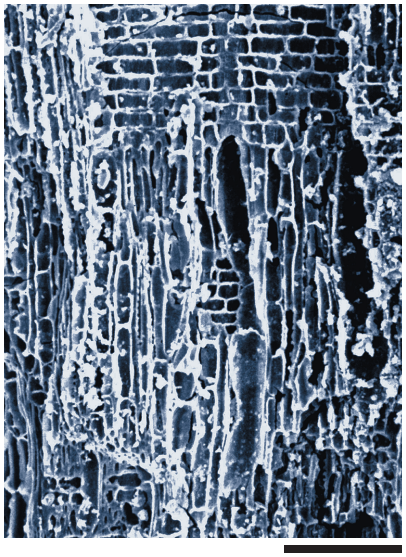
2c ハンノキ亜属（放射断面）
bar:0.1mm



3a コナラ属？（横断面）
SK47　bar:0.5mm

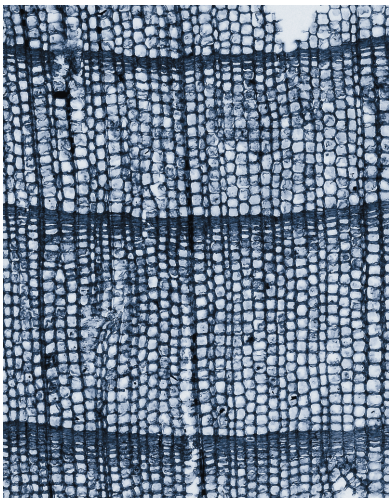


3b コナラ属？（接線断面）
bar:0.1mm

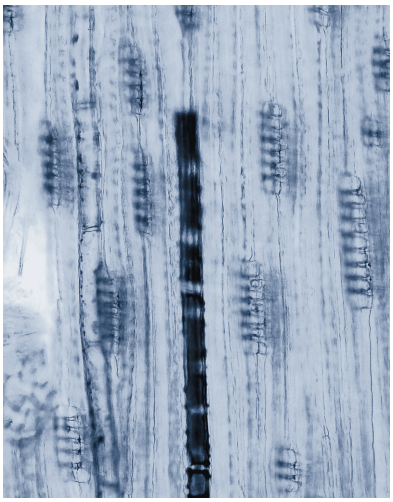


3c コナラ属？（放射断面）
bar:0.1mm

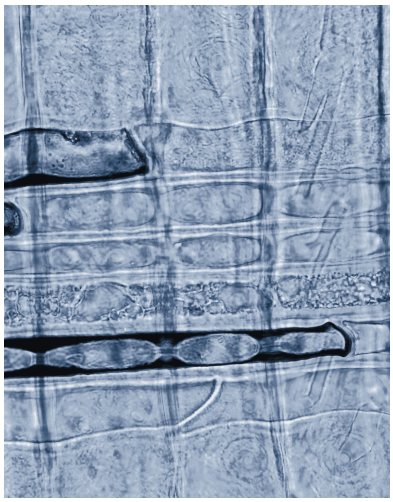
図版２　南木戸遺跡出土木製品材組織の光学顕微鏡写真



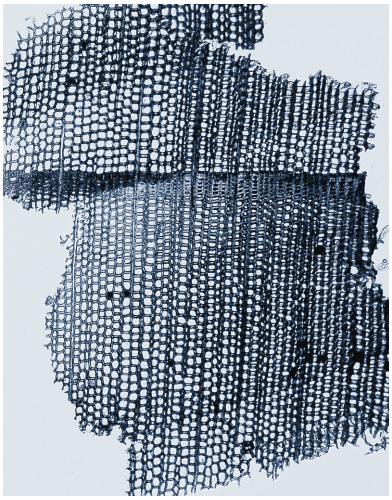
4a ヒノキ（横断面）
板材　bar:1.0mm



4b ヒノキ（接線断面）
bar:0.4mm

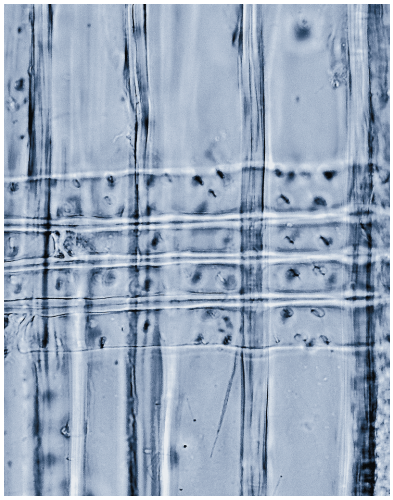


4c ヒノキ（放射断面）
bar:0.2mm



5a ヒノキ（横断面）
箸　bar:1.0mm

5b ヒノキ（接線断面）
bar:0.4mm



5c ヒノキ（放射断面）
bar:0.2mm

第Ⅳ章　まとめ

最後に、今回の南木戸遺跡の調査成果を簡単にまとめておく。

１．古墳前期初頭・古代・中世・近世の遺構が確認された。

２．古墳前期初頭の遺構は調査区の西側約半分にあたる、東西幅 30m 程の北東から南西にのびる微高地上に展開し、掘立柱建物２棟、竪穴住居 11 棟、溝１条、土坑 55 基を確認した。

３．遺構の重複関係から、古墳前期初頭の集落はおおむね６時期の遺構変遷が認められる（図 19）。なかでも、１期は調査区の西端近くで、L 字形に折れ曲がる幅約 4m の溝 SD08 を確認した。その形状から自然流路とは考えにくく、何らかの区画溝である可能性が高い。

４．２～６期は、調査区内で各時期２・３棟の竪穴住居が建つ。遺構の配置は、地形的にやや低い西側に竪穴住居群が並び、より高い東側（調査区の中央付近）に、掘立柱建物と土坑群が展開する。

５．竪穴住居は、２期の SB13（一辺 5.25m）を除くと、いずれも一辺が 3m 前後のきわめて小規模なものばかりである。

６．掘立柱建物もまた、小型で、柱掘形が丸く、柱間寸法が一定しないものである。所属時期も不明確だが、土坑群との重複関係から１期にさかのぼることは難しく、竪穴住居との主軸方位からみれば、２期ないしは４期である可能性が高い。

７．竪穴住居および溝 SD08 から出土した土器の所属時期はおおむね廻間Ⅰ式期に属するもので、一部廻間Ⅱ式期前半に下がる資料もみられる。

８．これら竪穴住居群のうち、SB02・03 と古代の竪穴住居 SB10 からは炭化材が出土し、それらについては AMS 法による放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正値は SB02 が cal AD 240、SB03 が cal AD 25/45/50、SB10 が cal BC 40/5 の測定値を得た。このうち、SB03・10 については、土器編年から想定される暦年代とは大きく離れることから、材の伐採年代ではなく、成育期間中の年代と考えられる。SB02 に関しては、３世紀中葉（AD 240 年）が廻間Ⅰ式期後半～Ⅱ式期前半頃の暦年代を考えるうえで重要な手がかりとなろう。

９．古墳前期初頭の南木戸遺跡に関しては、これまで『一宮市史　資料編二』に掲載された出土遺物しか情報がなく、特に遺構についてはまったく不明であった。今回の調査で得られたデータから復元される南木戸遺跡は、廻間Ⅰ式期～Ⅱ式期前半でおさまる比較的短期間の集落と考えられる。また、集落規模そのものも、近接する八王子遺跡のように大規模なものではなく、小型の竪穴住居数棟からなる比較的小規模なものと推定される。ただし、１期の SD08 は何らかの施設の区画溝である可能性が高く、今後、周辺の調査でその機能が判明することに期待したい。

10．古代の遺構群は竪穴住居２棟と溝１条、土坑 67 基で、所属時期は７世紀後半から８世紀前半頃におさまる。前述の八王子遺跡や山中遺跡からも同時期の遺構・遺物が出土しており、八王子遺跡ではこの周辺が中島郡拝師（はやし）郷と推定されていることから、本遺跡も拝師郷を構成する集落の一つであった可能性が高い。

11．中・近世に関しては、小柱穴と方形土坑が確認されており、ある時期は墓域であった可能性が指摘できる。

＊　樋上　昇 2001「八王子遺跡の古代をめぐる諸問題」『八王子遺跡　考察編』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 92 集

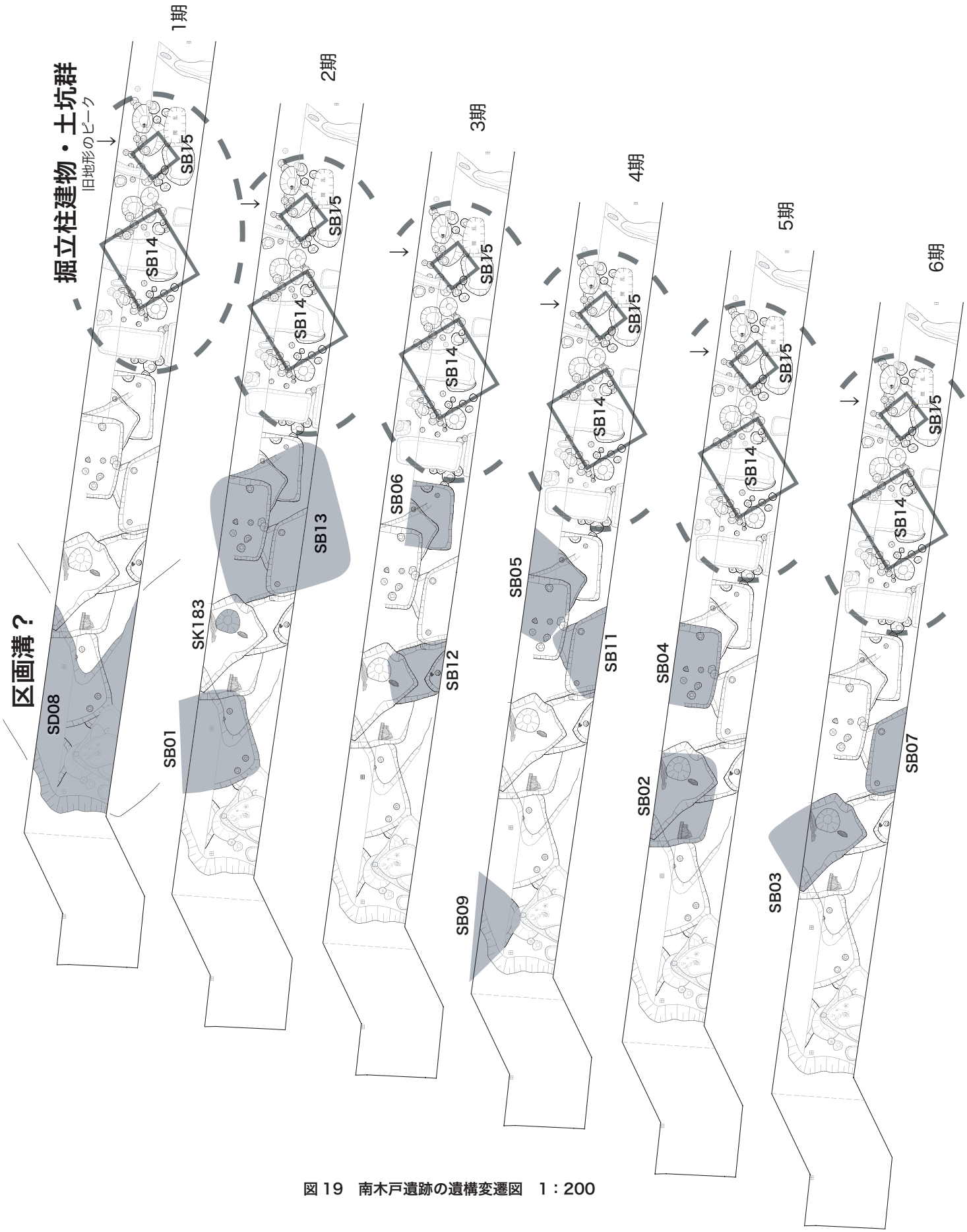
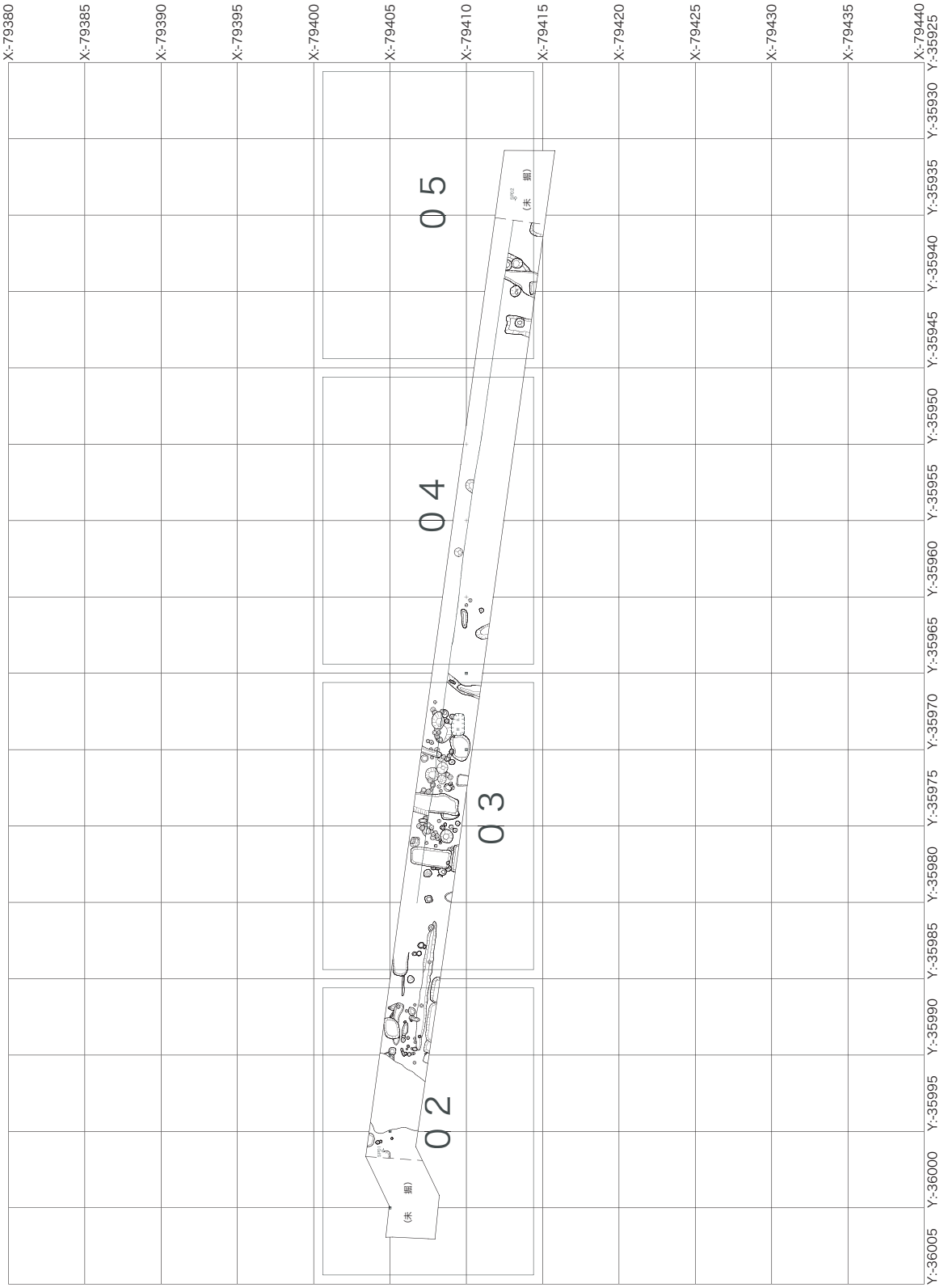


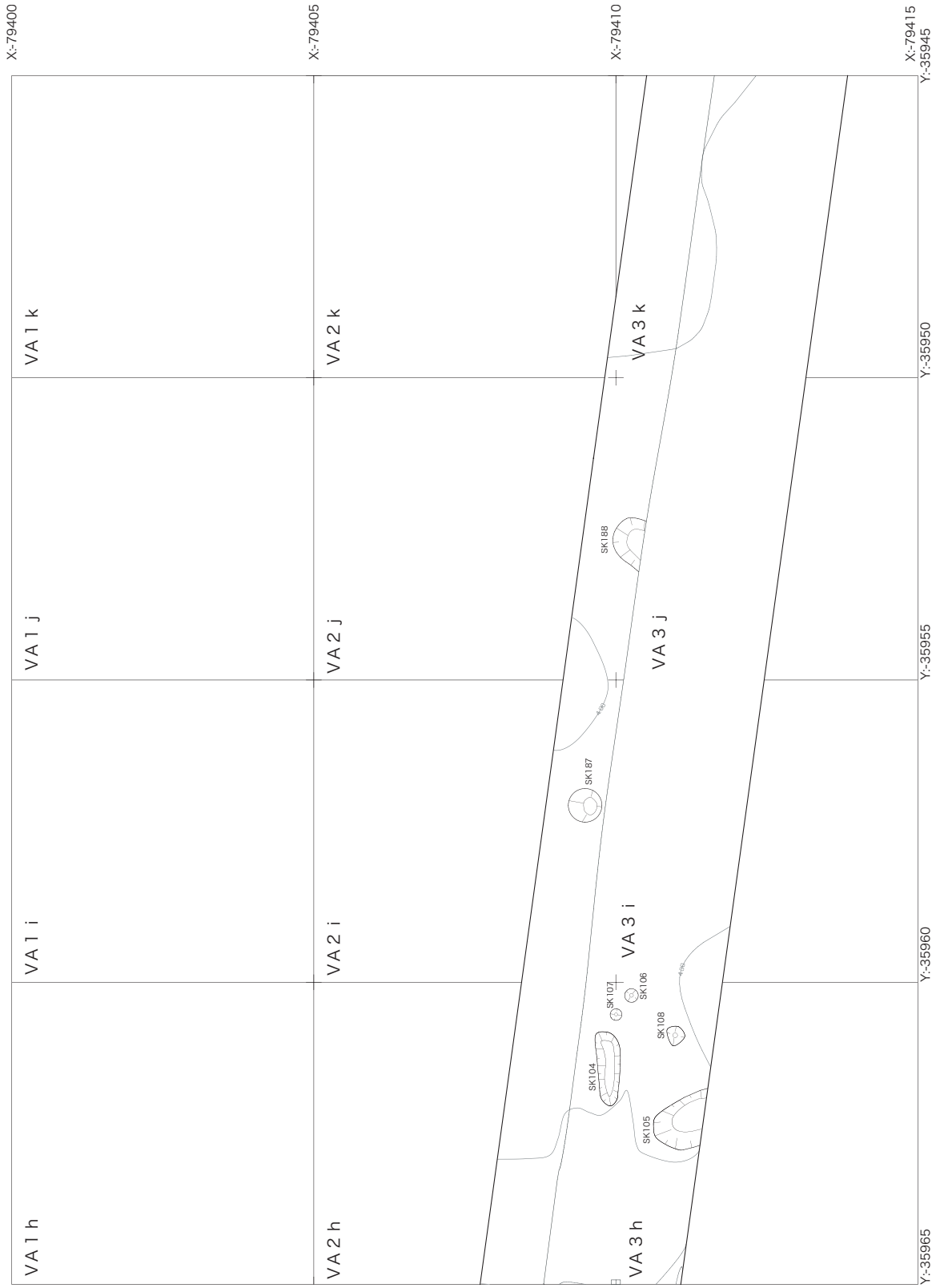
図 19　南木戸遺跡の遺構変遷図　1：200



遺構図版１　第１面遺構全体図　1：400

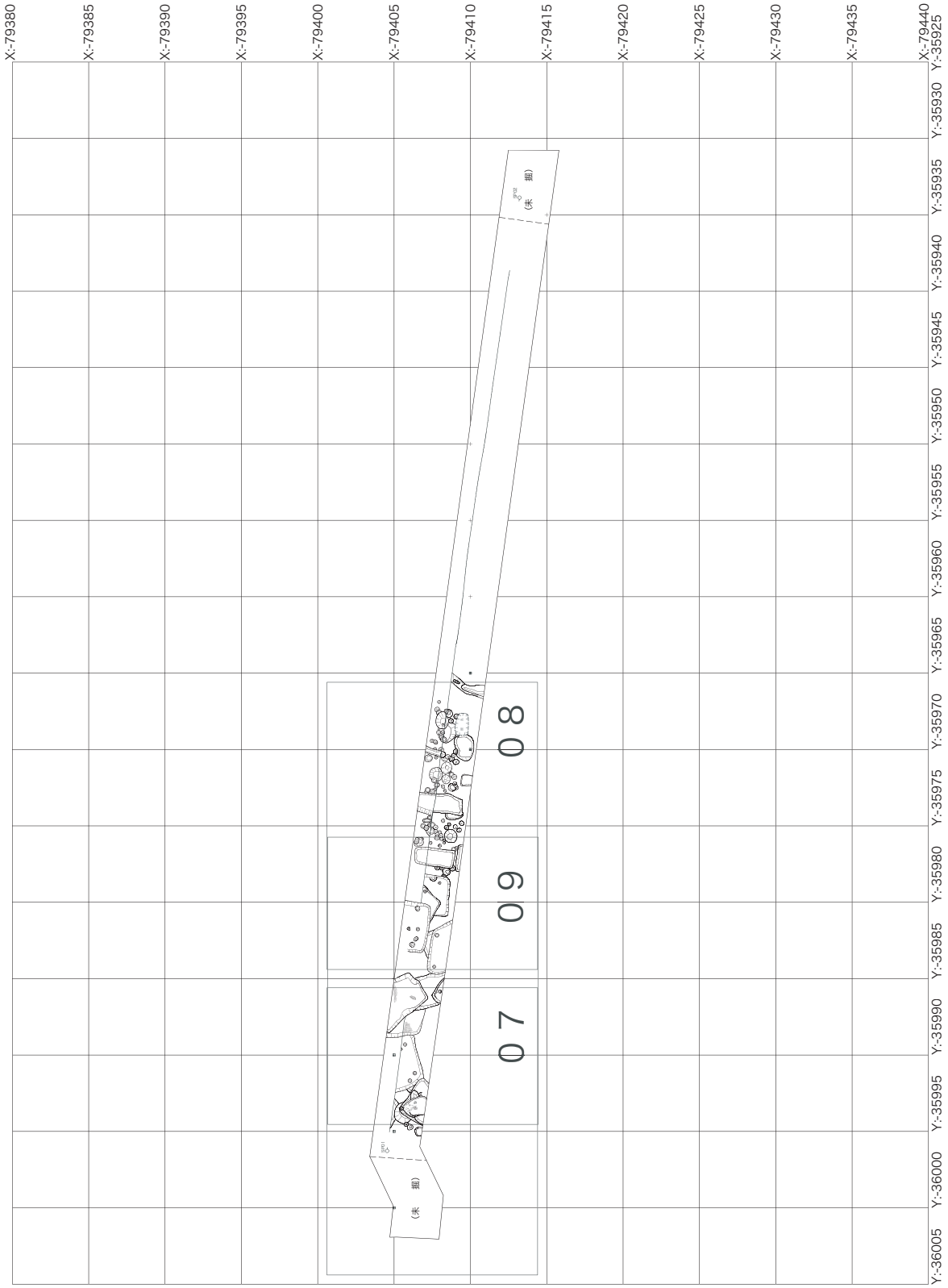
遺構図版２　第１面遺構分割図 (1)　1：100

遺構図版３　第１面遺構分割図 (2)　1：100



遺構図版４　第１面遺構分割図 (3)　1：100

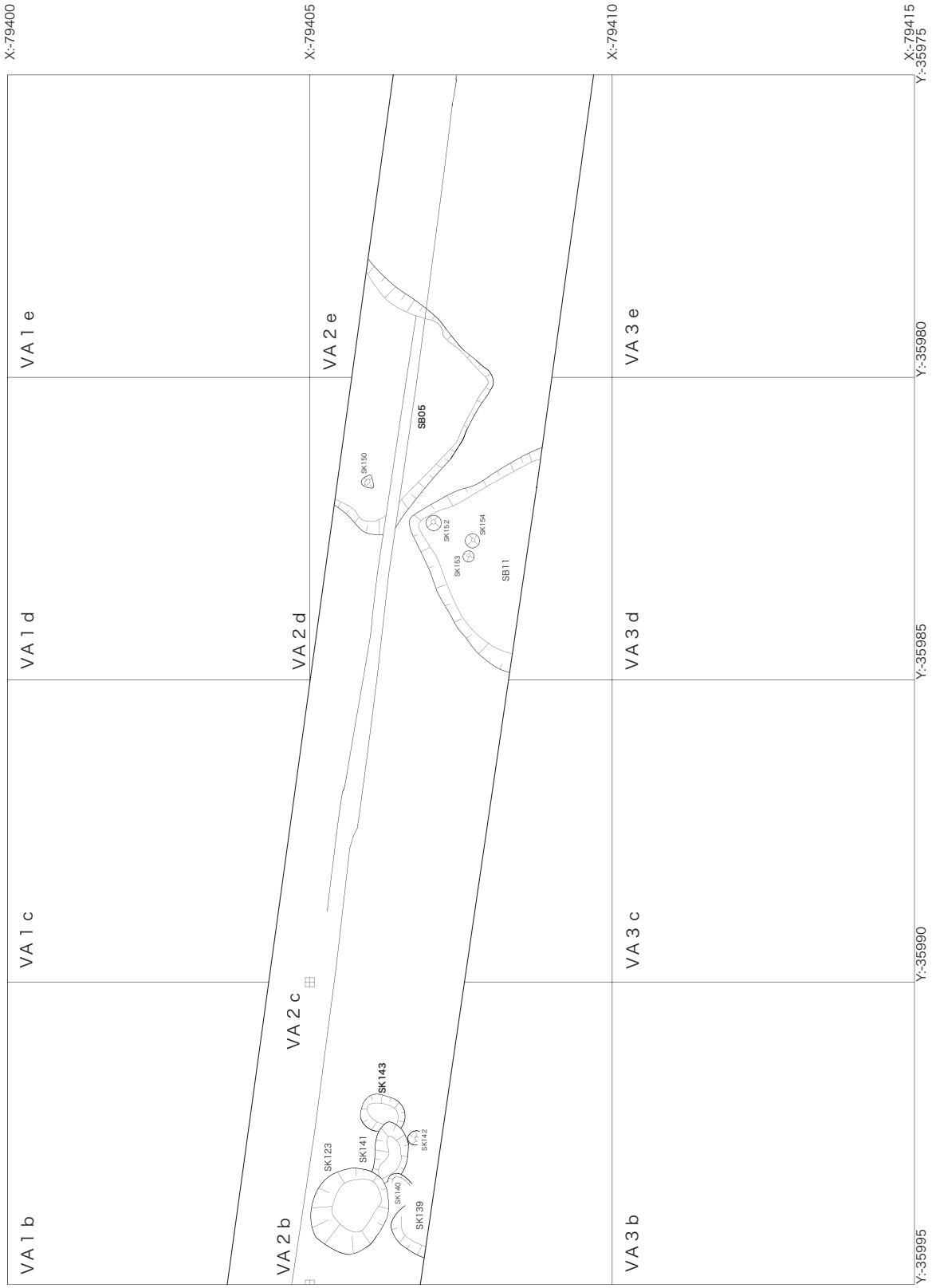
遺構図版 5　第 1 面遺構分割図 (4)　1：100



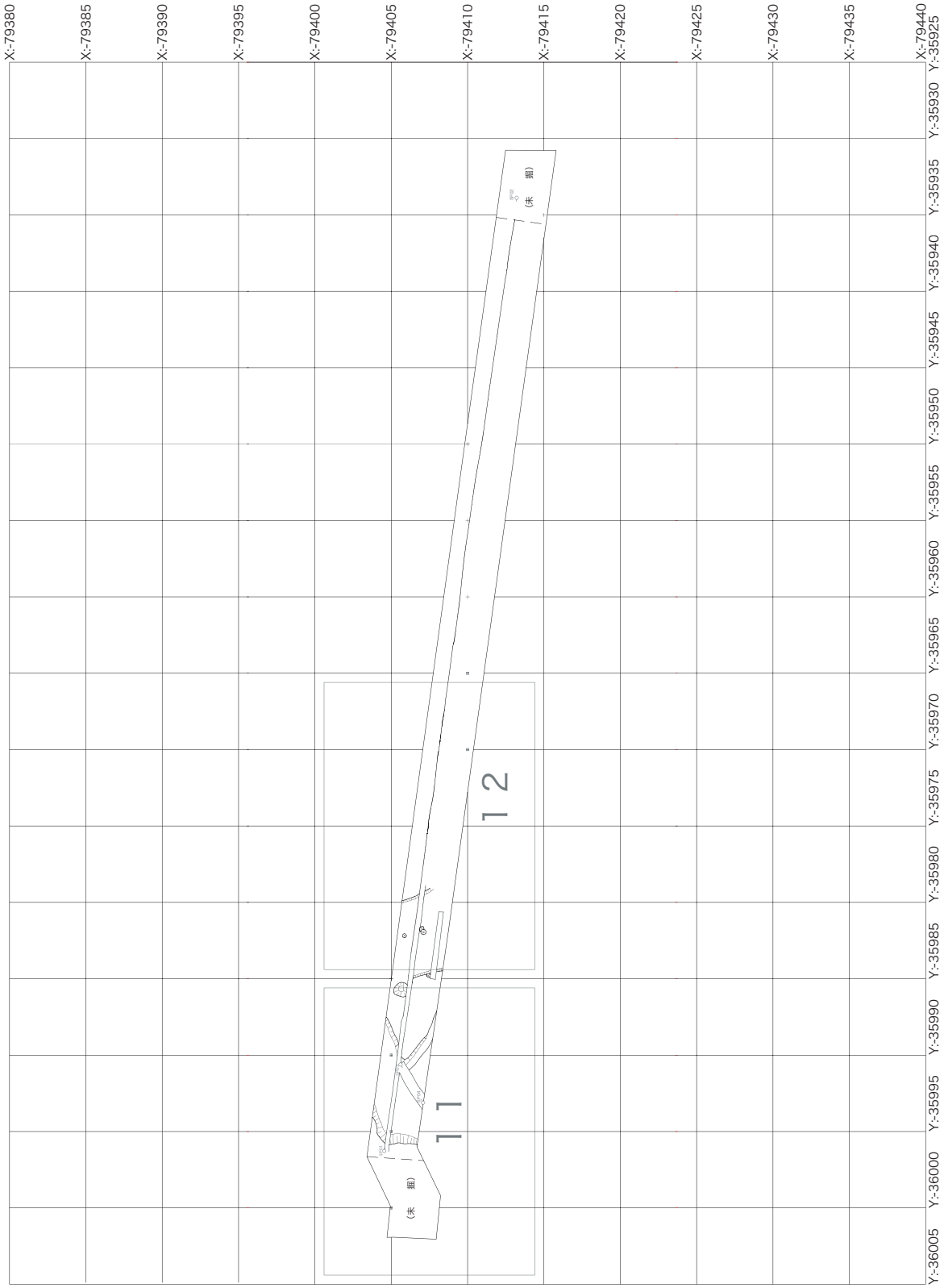
遺構図版６　第２面遺構全体図　１：400

遺構図版７　第２面遺構分割図 (1)　1：100

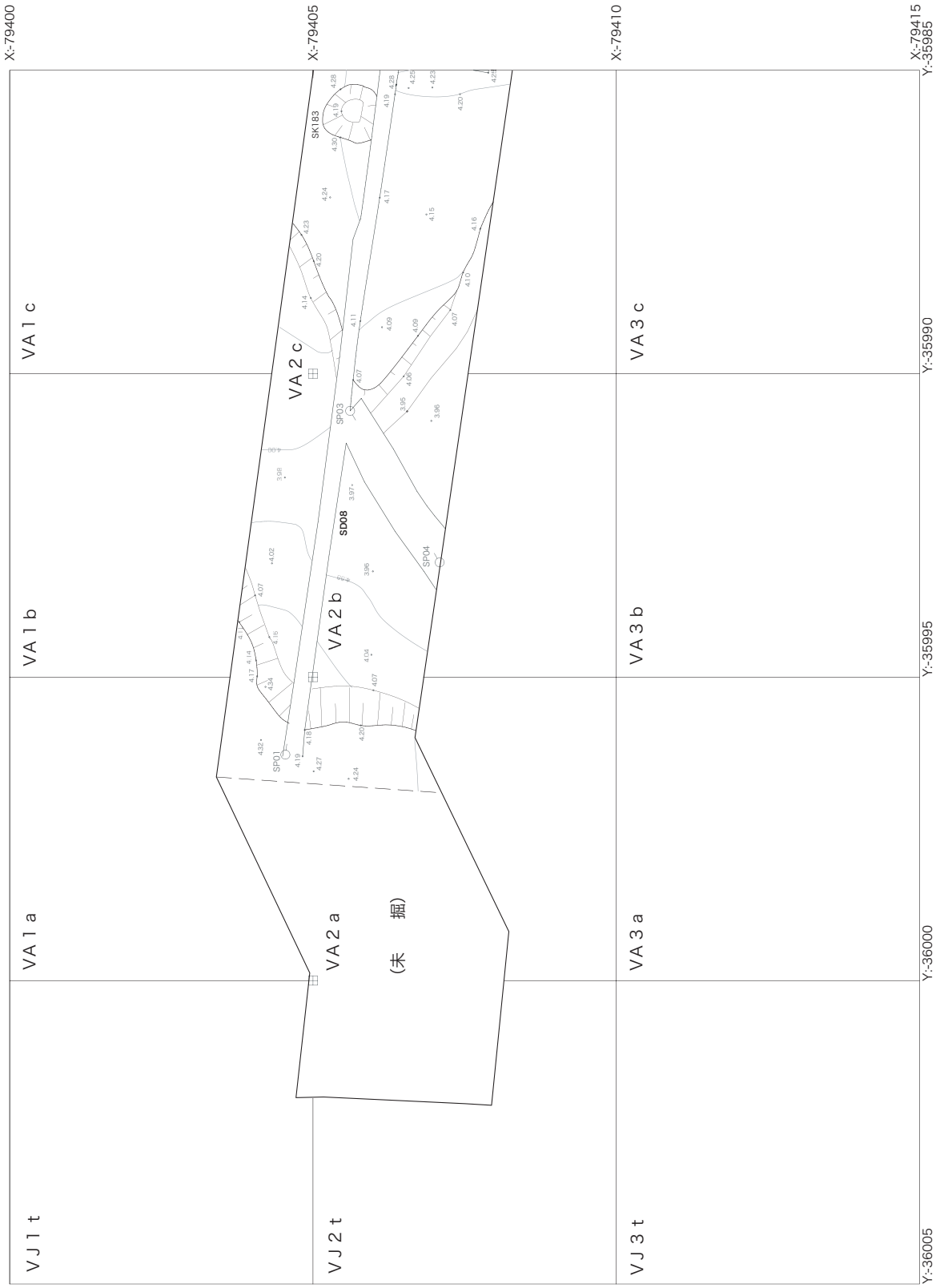
遺構図版８　第２面遺構分割図 (2)　1：100



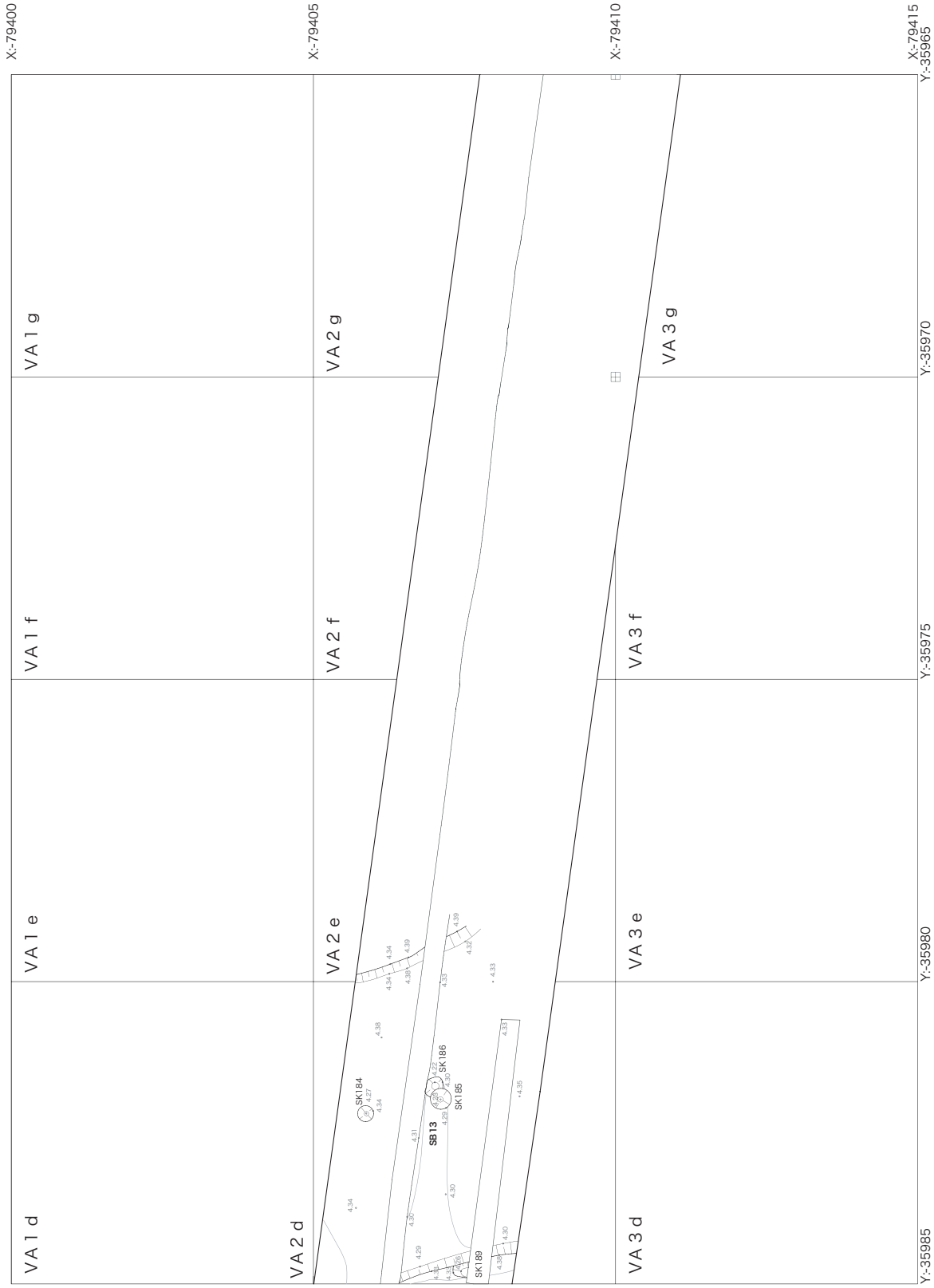
遺構図版９　第２面遺構分割図 (3)　1：100



遺構図版 10　第 3 面遺構全体図　1：400



遺構図版 11　第 3 面遺構分割図 (1)　1：100

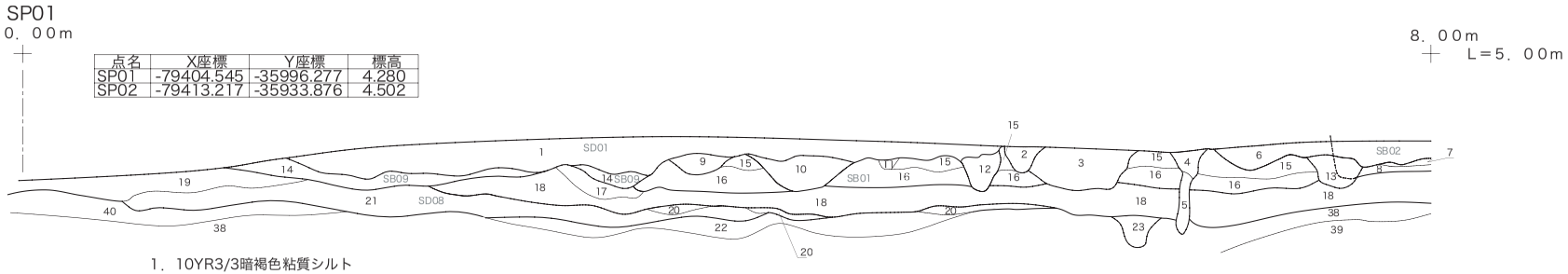


遺構図版 12　第 3 面遺構分割図 (2)　1：100

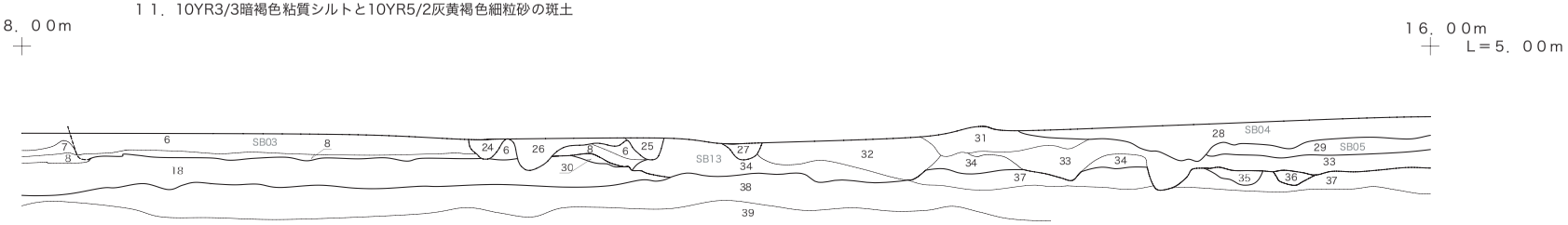
遺構図版13　調査区土層断面図(1) 1：40

SP01

点名	X座標	Y座標	標高
SP01	-79404.545	-35996.277	4.280
SP02	-79413.217	-35933.876	4.502

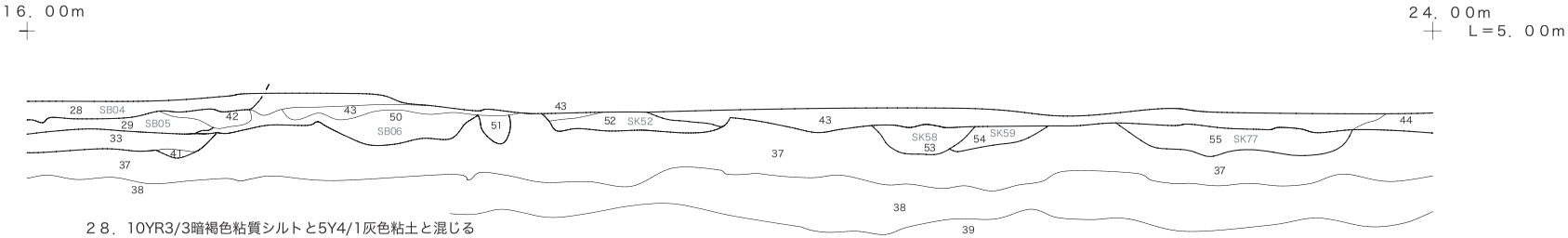


1．10YR3/3暗褐色粘質シルト
2．10YR3/3暗褐色粘質シルト
3．10YR3/3暗褐色粘質シルトと10YR5/2灰黄褐色細粒砂の斑土
4．10YR4/3にぶい黄褐色シルト
5．10YR4/3にぶい黄褐色シルトと10YR7/3にぶい黄橙色細粒砂の斑土
6．2.5Y5/2暗灰黄色シルト
7．2.5Y6/4にぶい黄色シルト
8．2.5Y5/2暗灰黄色シルト、炭化物大量に含む
9．10YR3/3暗褐色粘質シルト、10YR5/2灰黄褐色細粒砂斑入
10．10YR3/3暗褐色粘質シルトと10YR5/2灰黄褐色細粒砂の斑土
11．10YR3/3暗褐色粘質シルトと10YR5/2灰黄褐色細粒砂の斑土

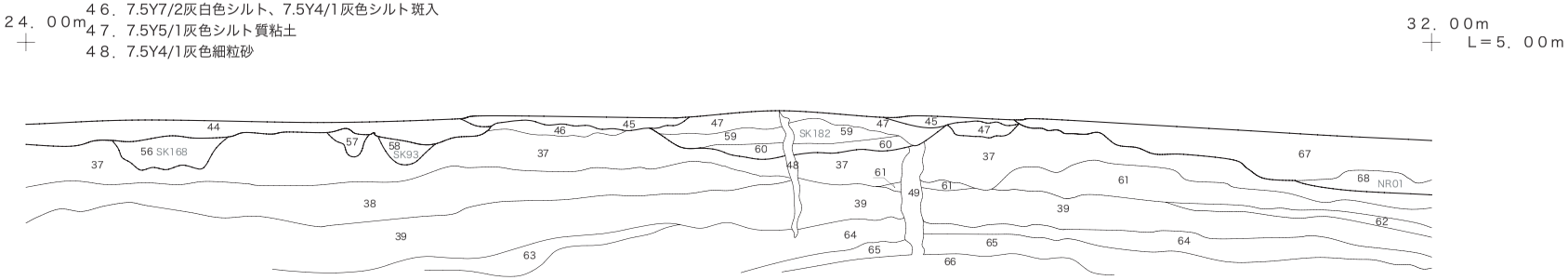


12．2.5Y4/2暗灰黄色シルト
13．10YR4/2灰黄褐色シルト、炭化物含む
14．10YR4/2灰黄褐色シルト、10YR5/2細粒砂斑入
15．2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト、10YR4/2灰黄褐色シルト斑入
16．2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト、炭化物含む
17．2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
18．2.5Y5/3黄褐色砂質シルト
19．10YR4/4褐色砂質シルト、10YR6/4にぶい黄褐色細粒砂斑入
20．2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂、炭化物大量に含む
21．2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂、炭化物含む
22．2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂、炭化物含む
23．2.5Y6/2灰黄色細粒砂、炭化物含む
24．10YR4/2暗灰黄色シルトと10YR7/3浅黄色シルトの斑土
25．10YR4/2暗灰黄色シルトと10YR7/3浅黄色シルトの斑土
26．10YR4/2暗灰黄色シルトと10YR7/3浅黄色シルトの斑土
27．10YR4/2暗灰黄色シルトと10YR7/3浅黄色シルトの斑土
28．10YR3/3暗褐色粘質シルトと5Y4/1灰色粘土と混じる
29．2.5Y5/3黄褐色砂質シルト
30．2.5Y5/3黄褐色砂質シルト、炭化物含む
31．2.5Y5/3黄褐色シルト
32．2.5Y4/2暗灰黄褐色シルト
33．2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト
34．2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルト
35．2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
36．2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
37．2.5Y6/4にぶい黄色細粒砂
38．2.5Y5/3黄褐色中粒砂
39．2.5Y7/2灰黄色中粒砂
40．2.5Y6/2灰黄色細粒砂

遺構図版 14　調査区土層断面図 (2) 1：40

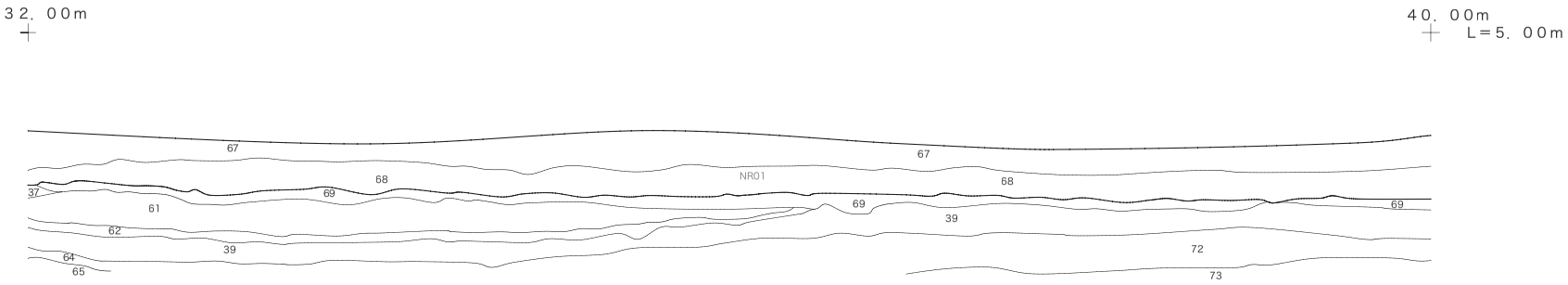


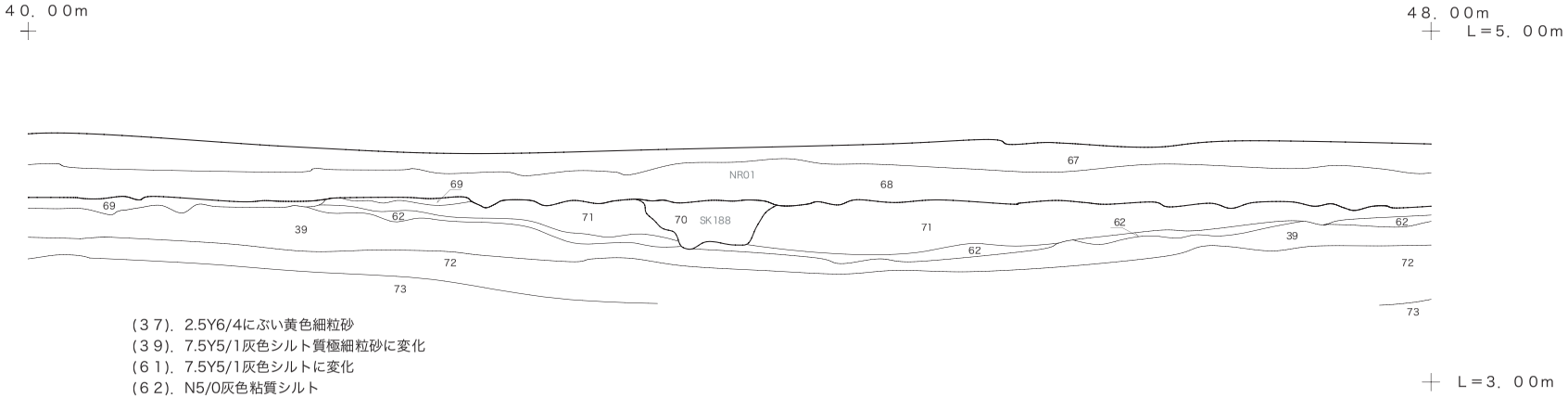
２８．10YR3/3暗褐色粘質シルトと5Y4/1灰色粘土と混じる
２９．2.5Y5/3黄褐色砂質シルト
３３．2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト
３７．2.5Y6/4にぶい黄色細粒砂
３８．2.5Y5/3黄褐色中粒砂
３９．2.5Y7/2灰黄色中粒砂
４１．2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
４２．7.5Y5/1灰色粘質シルト
４３．7.5Y5/1灰色粘質シルト
４４．10YR4/4褐色シルト
４５．10YR4/2灰黄褐色シルト
４６．7.5Y7/2灰白色シルト、7.5Y4/1灰色シルト斑入
４７．7.5Y5/1灰色シルト質粘土
４８．7.5Y4/1灰色細粒砂



４９．7.5Y4/1灰色細粒砂
５０．10YR4/2灰黄褐色シルトと10YR7/3にぶい黄橙色シルトの斑土、炭化物含む
５１．10YR4/2灰黄褐色シルトと10YR7/3にぶい黄褐色シルトの斑土、炭化物含む
５２．10YR4/2灰黄褐色シルト
５３．2.5Y5/3黄褐色細粒砂、2.5Y4/2シルト斑入、炭化物少量含む
５４．2.5Y5/3黄褐色細粒砂、炭化物少量含む
５５．2.5Y4/2暗灰黄色シルト
５６．2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルト
５７．2.5Y6/4にぶい黄色細粒砂、2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルト斑入
５８．2.5Y6/4にぶい黄色細粒砂、2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルト斑入
５９．2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルト
６０．2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂
６１．2.5Y6/3にぶい黄色シルト
６２．N5/0灰色粘質シルト
６３．2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
６４．2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
６５．2.5Y5/1黄灰色砂質シルト
６６．2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂
６７．7.5Y4/1灰色粘土
６８．7.5Y4/2灰オリーブシルト

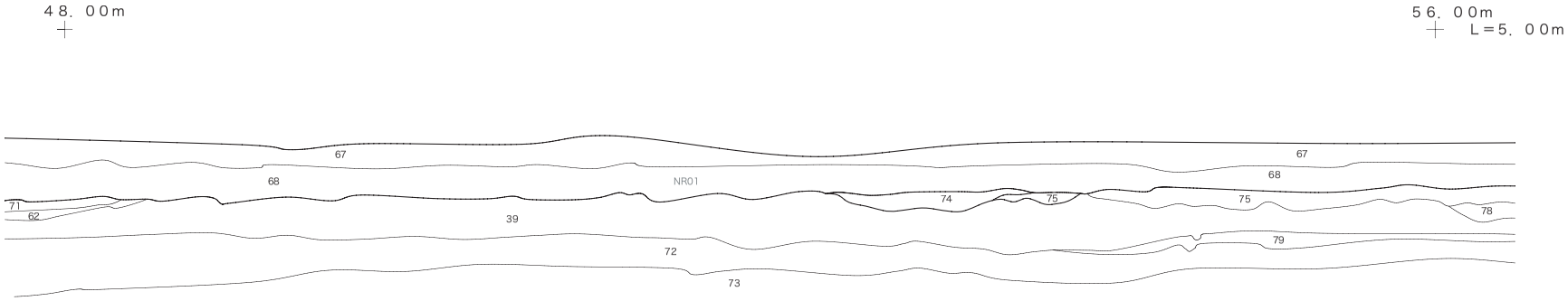
遺構図版15　調査区土層断面図(3)1：40

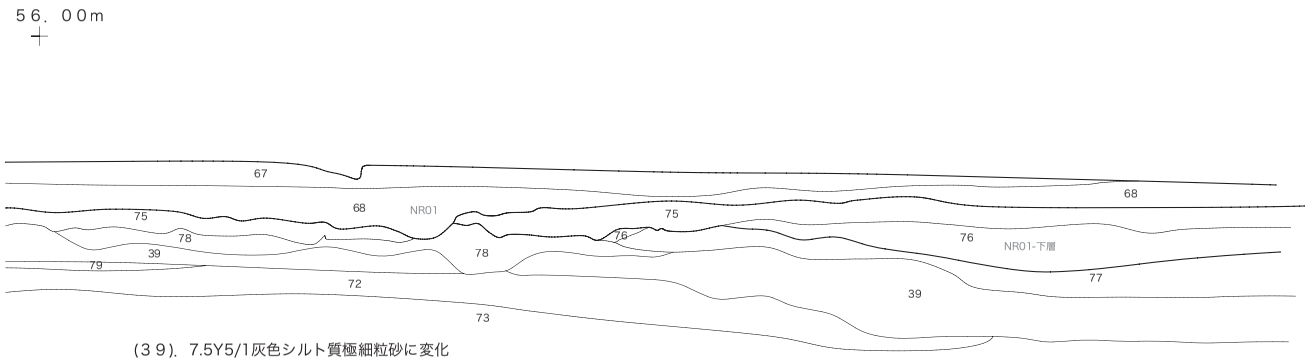




（３７）．2.5Y6/4にぶい黄色細粒砂
（３９）．7.5Y5/1灰色シルト質極細粒砂に変化
（６１）．7.5Y5/1灰色シルトに変化
（６２）．N5/0灰色粘質シルト
（６４）．7.5Y5/1灰色砂質シルトに変化
（６５）．7.5Y4/1灰色細粒砂に変化
６７．7.5Y4/1灰色粘土
６８．7.5Y4/2灰オリーブシルト
６９．7.5Y5/1灰色シルト、7.5Y4/2灰オリーブ色シルト斑入
７０．7.5Y2/1黒色粘土と7.5Y5/1灰色シルトの斑土
７１．7.5Y5/1灰色砂質シルト
７２．7.5Y5/1灰色シルト
７３．7.5Y5/1灰色細粒砂

遺構図版16　調査区土層断面図(4) 1：40





SP02
63．00m
L＝5．00m

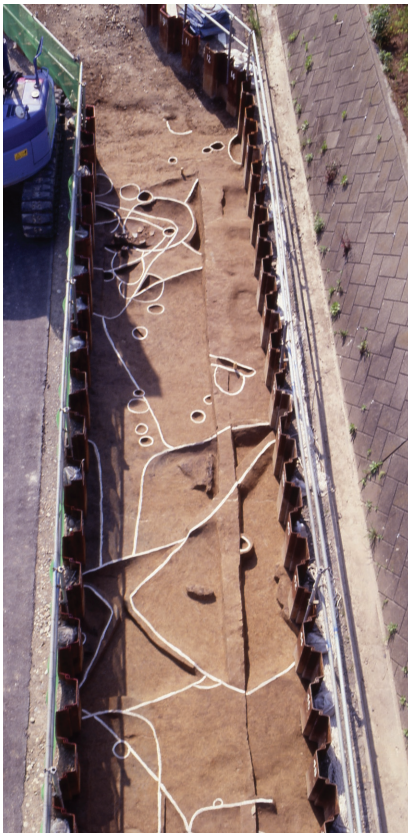
L＝3．00m

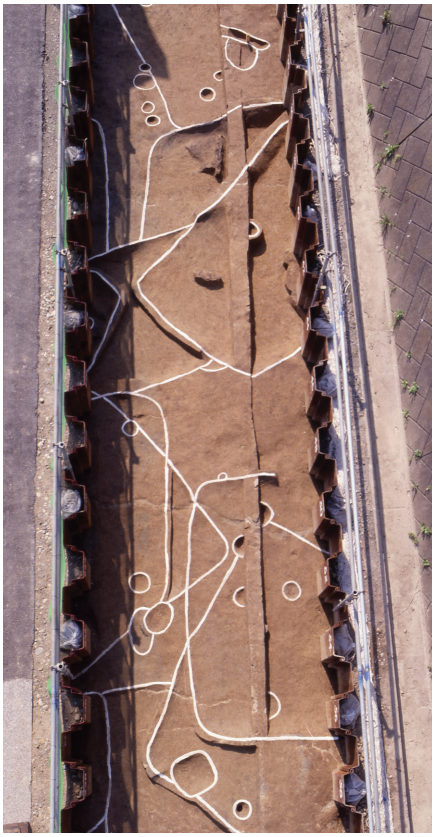
点名	X座標	Y座標	標高
SP01	-79404.545	-35996.277	4.280
SP02	-79413.217	-35933.876	4.502

(39). 7.5Y5/1灰色シルト質極細粒砂に変化
62．N5/0灰色粘質シルト
67．7.5Y4/1灰色粘土
68．7.5Y4/2灰オリーブシルト
71．7.5Y5/1灰色砂質シルト
72．7.5Y5/1灰色シルト
73．7.5Y5/1灰色細粒砂
74．5Y4/1灰色粘土と7.5Y4/1灰色シルトの斑土
75．5Y4/1灰色粘土
76．5Y3/2オリーブ黒色粘土
77．7.5Y5/1灰色シルト
78．7.5Y5/1灰色シルト、炭化物少量含む
79．5Y6/1灰色中粒砂

南木戸遺跡調査区遠景（東から）

調査区全景写真（東から）

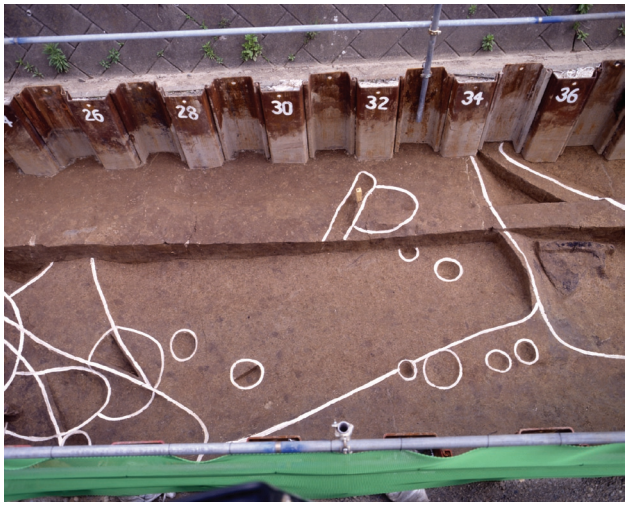




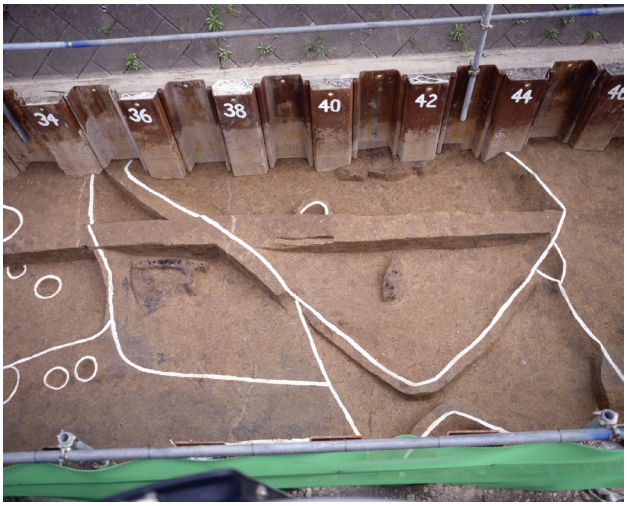
調査区分割写真（東から）

第１面遺構全景（東から）

第２面竪穴住居群（南から）



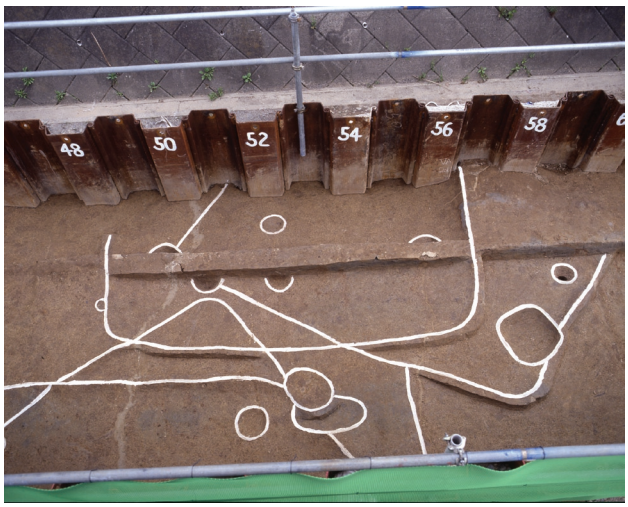
第２面 SB01（南から）



第２面 SB02・03・12（南から）

第２面 SB02 炭化物出土状況（南から）

第２面 SB03 炭化物出土状況（南から）

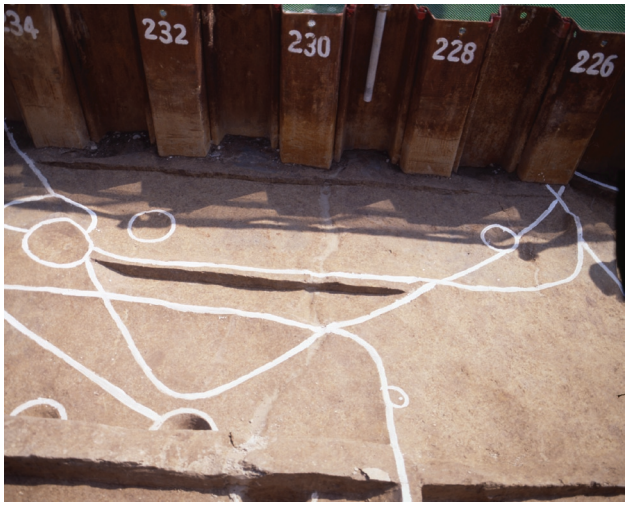


第２面 SB04・05・11（南から）

第２面 SB04・05（東から）

第２面 SB05（東から）

第２面 SB06（北から）



第２面 SB07・11（北から）

第２面 SB11（東から）

第２面 SB10（北から）

第３面 SB13（東から）

第２面 SK120（西から）

第２面 SK120（東から）

第１面 SK182（南から）

第１面 SK182 土器出土状況（南から）

第３面 SD08（東から）

第３面 SD08（西から）

第３面 SD08 土層断面（西から）

第３面 SD08 土層断面（東から）

第１面 NR01 上層（東から）

第１面 NR01 土層断面（西から）

遺物写真図版1

2

6

13

7

25

33

29

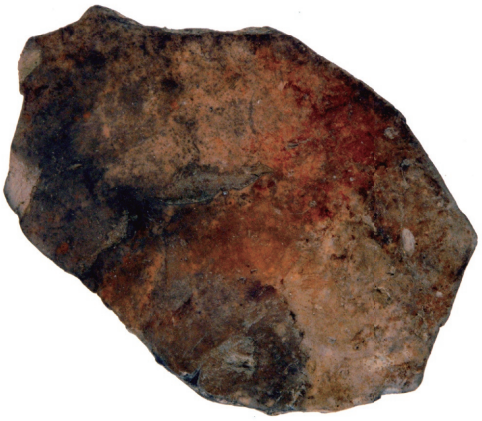
36

39

遺物写真図版2

54

41



46

48

1

2

ふりがな	みなみきどいせき
書　　名	南木戸遺跡
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第130集
編著者名	樋上　昇・鬼頭　剛・植田弥生・山形秀樹
編集機関	財団法人　愛知県教育サービスセンター　愛知県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒498-0017　愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24
発行年月日	西暦2005年3月31日
資料の保管場所	愛知県埋蔵文化財調査センター

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みなみきど 南木戸	あいちけんいちのみやしはぎわらちょう 愛知県一宮市萩原町 かわだがたあざみなみきど 河田方字南木戸	23207	02082	35°17′3″	136°46′16″	20030414～ 20040514	195 m²	愛知県水道用水供給事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南木戸	集落	古墳時代	竪穴住居11棟 掘立柱建物2棟 溝1条 土坑55基	S字状口縁台付甕 高杯 パレススタイル壺	萩原遺跡群の一角を占める集落で、特に1期には直角に折れ曲がる区画溝が、2～6期は2～3棟程度の竪穴住居・掘立柱建物が確認された
		古代	竪穴住居2棟 溝1条 土坑67基	須恵器杯蓋・身 須恵器擂鉢 伊勢系土師器甕 木製品	
		中世	土坑14基	灰釉系陶器・木製品	
		近世	溝6条 土坑12基	陶磁器	

要　約

南木戸遺跡は日光川左岸の沖積微高地上に立地する古墳初頭を主体とする集落遺跡である。昭和37年の名神高速道路建設の際、河田方高架橋の敷設工事において廻間Ⅰ～Ⅱ式期に属する大量の土器と木製品が出土して遺跡の存在が知られるようになった（『一宮市史　資料編二』所収）。

今回の調査は、名神高速道路南側の側道にあたる市道256号線の下に水道管を埋設するための事前調査として、幅約3m、全長約70mの調査区を設定した。その結果、調査区の西寄りで幅がおよそ40mほどの微高地を確認した。さらに微高地の西半分にあたる約20mの範囲で、廻間Ⅰ式期後半～Ⅱ式期初頭に属する竪穴住居11棟と小型の掘立柱建物2棟、溝1条、土坑55基を検出した。集落はおよそ6期の変遷が認められる。うち特に1期は、居住域の西辺がL字に折れる幅4～5mの区画溝を確認した。2期～6期は調査区内でそれぞれ2～3棟の竪穴住居があり、その東には小型の掘立柱建物数棟と土坑群が集中して築かれている。

このほか、8世紀前半の竪穴住居2棟と溝1条・土坑67基、中世および近世の土坑が多数確認されている。

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 130 集

南木戸遺跡

2005 年 3 月 31 日

編集・発行　財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印　刷　株式会社 クイックス